平成 17 年度

弘前大学生涯学習教育研究センター年報

第 9 号

平 成 18 年 3 月

弘前大学生涯学習教育研究センター

目　　次

挨　拶　　弘前大学生涯学習教育研究センター長　浅　野　　清

Ⅰ．**論文等**

キャリア教育志向の「大学開放」事業の展望……藤　田　昇　治……　1

生涯学習への取組みの課題
　―「健康」に関する公開講座等を実施して―　……菅　　世智子……　11

観光ビジネススクール「はやて」（平成 17 年度）報告……　21

Ⅱ．**事業報告**

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業 ……　63
（1）公開講座……　63
（2）生涯学習講演会……　64
（3）その他……　69
（4）ホームページ On-Line 公開講座 ……　70

2. 学部の主催事業など
（1）人文学部……　73
（2）教育学部……　74
（3）医学部……　79
（4）理工学部……　81
（5）農学生命科学部……　82
（6）遺伝子実験施設……　84

Ⅲ．**センター関連規則など**

1. センター関連規則 ……　85
2. 機構・組織図 ……　89
3. 地図・連絡先 ……90

編集後記

挨　拶

発刊にあたって

弘前大学生涯学習教育研究センター長
浅　野　　清

本日ここに当生涯学習教育研究センターの平成17年度年報を刊行する運びとなりました。平素、当センターの活動に御協力いただいている皆さまにお目を通していただき、忌憚のない御意見、御感想をいただければ幸いです。

平成17年度、本センターはこれまで同様、地域住民への学習機会の提供や今日的課題に対する情報提供として、多様な事業を展開してきました。その中には継続的に行ってきた自治体との共催による公開講座、主催講演会、キャリアアップ講座「はやて」、ホームページの充実などが挙げられます。本年度はまた新たな取り組みとして、東京・江戸川区の農業経営者団体との共催による特別講演会、自治体との共催によるレクチャーコンサートを開催し、確かな手応えを感ずることができました。今後も地域という枠に囚われず、事業の内容も含め、センターの活動をさらに広げていく所存です。

平成18年度はセンターが創設されて丸10年になることから、これまでの経験や反省を含め記念事業を計画しています。そこでは、これからの事業方針や年報の見直し、さらにはセンターの在り方についても議論されることが予想されます。皆さまのお知恵を拝借しながらセンターの活性化、事業の充実を目指して取り組んでいきたいと思っています。御協力、御指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

平成18年３月

Ⅰ. 論　文　等

キャリア教育志向の「大学開放」事業の展望

生涯学習教育研究センター 助教授　**藤　田　昇　治**

Ⅰ，はじめに

「大学開放」がこれまで充分追求してきていない領域として、「キャリア形成」、「キャリア教育」がある[1)]。公開講座・講演会などの、地域住民を対象とした「学習機会の提供」は、概して一般教養に偏っていた、ということができよう。「中高年」や「主婦」を主たる対象として、高等教育機関としての「一般教養」を重視したカリキュラムに重点がおかれたのである。

また、「パートタイム学生」の受け入れや「社会人入学」、さらには「授業公開」といった「大学開放」においても、図書館・スポーツ施設などの「開放」においても、「キャリア形成」や「キャリア教育」には軸がすえられてはいなかった、ということができよう。

もっとも、皆無だということではない。ちなみに弘前大学を例にとれば、医療関係者を対象とした専門的知識・技能の習得を目指す公開講座、サテライトを会場として実施される大学院の授業などが開催されてきている[2)]。

こうした中で、昨年度から実施されている「観光ビジネススクール『はやて』」は、従来の「大学開放」を一歩先に進めたもの、それも極めて大きな一歩である、と考える。

この小論では、この「観光ビジネススクール『はやて』」に即して特徴を紹介しながら、今後の「大学開放」の在り方について実践的に論点整理を行いたい[3)]。

Ⅱ，「大学開放」の到達点

1，「大学開放」の事業展開とその特徴

(1) 教育機会の提供

1) 公開講座・講演会等の実施

「大学開放」という場合、多くの人にとっては公開講座や講演会などの実施を意味し、大学という高等教育機関が一般市民に対しても教育機会を提供する、という意味で捉えられてきた。そうした教育機会は、一回だけの講演会として、あるいは数回の連続講義として構成されることが多かった。

そうした「教育機会」は、おおむね①大学の講義の内容をほぼそのまま活用した形で、大学生向けの講義と同様に実施されるもの、②市民向けに「わかりやすく」構成されたもの、の２つに大別されている。

教育内容としてとらえなおした時、これまで大学が実施してきたこうした公開講座・講演会等は、圧倒的多数がキャリアアップとは直接関係のないものであった、ということができよう。

2) 授業の公開

大学が行う「教育機会の提供」は、これまで「公開講座」が中心であったことはすでに述べた。ここで今少し「教育機会の提供」ということについて考えてみよう。

弘前大学では、「公開講座」の他にも、講演会・セミナー等様々な名称の事業を展開している。「公開講座」が学則に明記されている以上有料の講座として実施しているのだが、講演会でも連続講演会という形態のものもあり、実質的にはシリーズものでの「学習機会の提供」となっているものもある。

また、「教育機会の提供」という場合、正規の授業も「科目等履修生」や「聴講生」として受講が可能となっていることは言うまでもない。

しかし、多くの市民にとって、あるいは大学の事情を知らない人にとって、「科目等履修生」という名称はなじみの薄いものであり、また「正規の学生」以外の市民が大学の「正規の授業」を受講できる制度がある、ということさえ知らない人が多い、というのが実態である。

そこで昨年度から、「パートタイム学生」という呼称を積極的に使用して広く一般に広報している。２単位の講義を受講すると、検定料や授業料などで７万円近い金額となるのだが、それでも広報活動（様々な社会教育施設などへのポスター・チラシを配布）への反応として問い合わせや申し込みの相談があり、現時点では充分市民に知られていないという状況をどのように打開するのか、という課題が存在すると考える。

ところで、福島大学や岩手大学等ではこうした「科目等履修生」の制度とは別に、「授業公開」を行っている。「科目等履修生」と比較した場合極めて低料金であることから、今後「教育機会の提供」という意味では重要な役割を果たすものと考える。勿論、そこには様々な問題も内在している。市民の受講者が「正規の学生」と比較して受講の前提となる専門的知識などをどれだけ習得しているのか、といった問題である。それにしても、こうした試みは、確実に地域住民への「学習機会の提供」として積極的な意義を持つ、と考える。とりわけキャリアアップ教育ないしリカレント教育の充実を志向するならば、一面では「科目等履修生」となって正式に単位取得を目指す人の存在も重視される必要があるのだが、他面では学習しようとする「コンテンツ」だけを求める人の存在も充分考えられることから、低料金での「授業」の受講が可能である点は、今後積極的な意味をもつものと考える。

(2) 施設の開放

「施設の開放」という場合、大学の持っている「施設」には多様なものがあることを確認しておきたい。

すでに多くの大学では附属図書館を一般市民に開放するようになっている。公立の図書館と比較して、いわゆる専門書の蔵書が多い大学図書館は、市民にとって学習活動や「研究」活動を行う上で積極的な意義を持つものである。

この他、テニスコート・グランドなどのスポーツ・体育施設が一般に開放されている場合も多い。

近年、大学博物館の建設が進行していることも注目される。研究活動の中で蓄積された多くの資料が、博物館資料として整備され一般に公開されるようになっているのである。

そこでは、資料の受け入れ・保存・管理などにおいて様々な問題が存在しているのではあるが、「大学開放」という視点からすれば重要な意義を持っている、ということができよう。

弘前大学の場合、農学生命科学部附属生物共生教育研究センターが、「農場」という条件を活用して積極的に教育事業を行っている。宿泊研修も可能で、自然・環境問題について体験的に学習できる条件を有している。

さらに、集会室・ホールなどの施設も、市民の学習や文化創造活動に活用し得るものとして開放されている。

こうした教育学習やスポーツ施設のほか、「研究」のための施設や設備の「開放」も一部では「開放」されている。弘前大学を例にすれば、「遺伝子実験施設」の研究機能が、一部ではあるが「開放」されているのである。

(3) 研究機能の開放

「大学開放」の中で研究機能の「開放」ということは、今日では「外部資金の獲得」という意味で捉えられることが多いように考える。企業や行政から研究資金を獲得することが重視される傾向にあり、また、研究成果を「知的財産」として活用しようという傾向である。

しかし、今後改めて地域の課題を研究課題として位置づけ、地域に根ざした大学づくりということが問われる、と考える。つまり、企業からの研究費の獲得というよりも、地域住民の生活課題や地域を活性化させる上で地場産業の育成などを展望した研究活動を行っていく、といったスタンスである。

こうした視点をさらにこの小論の問題意識に引きつけて言及するならば、キャリア教育で一定の技能・知識習得を行い、自らの労働力能を向上させた人に対して「職場」を確保できるように、地域の産業振興・活性化に結びつくような研究開発が求められている、ということになる。勿論、それは決して容易なことではなく、研究成果や新たな技術の創造が直ちに起業に結びつくというものではなく、したがって労働市場の拡大に直結するというものでもない。しかし、長期的な戦略の下で、地域振興・活性化に結びつくような研究やキャリア教育が求められている、という方向性をもつことこそ、「研究、教育、地域（社会）貢献」の意味するところである、と考える。

2,「大学開放」と大学を取り巻く諸条件

(1) 経済状況の深刻化

日本経済はかつての危機的状況を脱したという認識が広範に普及してきている。確かに全国的な統計類の数字はそうしたとらえ方を立証しているように見える。小泉政権が推進してきた「構造改革」の「成果」というとらえ方も為されている。

しかし、地域間の格差は大きく、例えば有効求人倍率は青森県では未だに全国最下位にあり、「景気回復」という実感はない。

もちろん、経済的な条件に対応して大学が果たすべき役割は、一面では積極的に経済活動にコミットするべきとする立場が考えられ、他面では経済活動からは独自な立場を保持することも必要である。つまり、地域産業を活性化するような様々な研究を行い、技術開

発を追求する立場と、企業からの要請に対して「企業の下請け」となるのではなくあくまで「大学として社会的に果たすべき役割」を重視しようとする立場である。これらは一見すると対立しているように見えるが、いずれも追求されるべきではないか、と考える。重要ななことは、あくまでも大学の主体性を保持する中で、「研究、教育、地域（社会）貢献」を図ることが重要であると考える。

(2) On the Job TrainingとOff the Job Training

この間の企業の雇用政策において、徹底的なリストラが行われると同時に労働者教育で注目されることは企業内教育における変化がある、と考える。今日なお企業内教育は企業の労働者管理の基軸の一つであるのだが、その大枠が放棄されたということではないのだが、次第に労働者教育をアウトソーシングに切り替える傾向が強まっている、と考える。つまり、企業内で自己完結した従業員教育を行うのではなく、専門的な民間の研修請負企業に委託したり、労働者の自己教育（ここでは自己責任による職業能力開発という意味あいで使用している）に期待する、という傾向である。

例えば、ホテル業界では、一定のホテル勤務の経験を持つ講師陣を抱えた研修請負企業があり、個別のホテルから従業員を募集して研修事業を実施する、といった状況である。

また、「自己教育」についてみると、日常的な個人の努力が必要とされるとともに、各種の自己啓発セミナーなどに自己負担で参加し自己の労働力の価値を向上させる努力が求められている、といったことである。

今日、各企業では、業種や事業規模によって異なるとはいえパートタイム就労者の雇用比率を高める傾向にある。そのことは、正規職員の間での「競争」を激化させるものであり、またパート就労を志向する労働者の間の「競争」をも激化させるものとなっている。雇用する企業の側で、従来正規職員が行ってきた労働の質を低下させない範囲でパート従業員に代替を図ろうとするからで、そうした要求に応えられない従業員は容赦なく解雇される、ということになる[4)]。

こうした状況を考えるとき、生涯学習政策が生涯にわたる職業能力開発政策である、という側面が浮き彫りになってくる。そしてその基本的な要素に、「自己啓発」すなわち自らが自覚的に自らの職業能力を高めていくことが求められる、という考え方である。

(3) 情報通信システムの整備と「大学開放」

「大学開放」を今後推進していく上で、情報通信システムの急速な発達に注目する必要がある、と考える。

今日ではインターネットの普及が急速に進展し、未だに中高年と若い世代との間では普及に格差が存在しているが、それにしても確実に中高年層でも普及してきているのである。

この情報通信システムを利用して、e-learningの可能性につて若干述べておきたい。

後に詳述するが、今日の大学教育では必ずしも多くの学生が「自立的な学習」をしているとは言い難い状況がある中で、e-learningはすぐれた教育方法・形態とは言い難いのではないか、と考える。しかし、「大学開放」の視点から対象を社会人に限定した場合、その意義・可能性についてはことなったものとなる。つまり、「高等教育機関」として蓄積さ

れた「研究と教育」が、一般に「開放」される手段としてみた場合、一定の有効性がある、ということである。

いうまでもなく、在宅で、あるいは勤務する場所で、大学が発信する様々な情報を入手するということは、すでに一般化していると考える。それに対応して、教員が行っている研究の概要や研究業績、担当している授業科目などが公開されている。また、シラバスも公開されており、大学で行われている研究や教育に関する情報公開は、以前と比較して積極的に行われるように成っている。

問題をe-learningの教育的有効性に限定した場合、正規の学生の場合には従来の「対面授業」の有効性が重視されるのだが、社会人の場合は大学にアクセスすること、大学の講義を受講すること自体が困難であることからすると、情報通信システムを利用した教育機能の「開放」は、今後大きな可能性を持つものと考える。

Ⅲ,「観光ビジネススクール『はやて』」の実施状況とその特徴

1, コンソーシアムの構築

(1) 自治体と大学、そして民間団体・ＮＰＯ

平成16年度からスタートした「観光ビジネススクール『はやて』」は、それ自体としては青森県から委託された事業である、ということになる。新幹線が八戸市まで延長されることで生まれた条件を活かして、地域産業の活性化を図ろうとする事業の一環として行われてきたものである。

しかし、それは自治体と大学、そして民間団体・ＮＰＯなどと協働する要素を内在させており、地域コンソーシアムづくりを可能とするものとなっている。つまり、観光という地域における基幹産業の活性化を図る上で、大学や行政、商工会、住民組織などが連携して取り組む必要性がある、ということである。また、「観光ホスピタリティ」は、単に直接観光業に従事する人々にのみ求められるものではなく、広く地域住民に求められるものである。それはすぐれて「地域づくり」という要素を内在させたものである、ということができる。

(2) カリキュラムと学習方法への共同の取り組み

この「観光ビジネススクール『はやて』」の取り組みの特徴として、カリキュラムづくりや学習方法を追求するにあたって、大学と行政とが共同で対処している、ということがある。弘前大学では「観光」そのものを専門に研究する教員がいないのだが、経営学担当の教員をコーディネーターとして、青森県文化観光部の担当者と共同でテーマ・内容・講師の選定を行った。「観光ホスピタリティ」の向上を、観光や地域産業の活性化、そして生涯学習といった複合的な立場からの議論をもとに、カリキュラム作成が行われているのである。

学習方法についても共同で議論を行い、平成16年度の反省の中で、後述するように「参加体験型」の学習方法を追求することが行われたのである。

2, 参加者の動向から

平成16～17年度と、2年にわたって行われてきた「観光ビジネススクール『はやて』」について、昨年度と比較しながら今年度の特徴について簡単に紹介したい。

第一に、参加者の動向である。定員30名に対してそれを上回る人の問い合わせ・申し込みがあったのだが、「少数精鋭」にこだわって、結果としては33件の申し込みを受け付けた。ここで「件」と表現したのは、「団体」としての申し込みを受け入れたからである。「団体」として参加することのメリットは、勤務などの条件から参加できない回には別の人が代理で出席できる、ということにした点である。実際、今回は2つの組織で参加者が入れ替わる、交替制度が活用されている。

受講者には、ホテル関係者、商工会職員といった観光産業関連企業・団体からの参加が定着していることが注目される。弘前市内のあるホテルからは16年度に引き続き17年度も3名の出席があった。これはホテル側の積極的な位置づけの下、「はやて」を「職員研修」の場として位置づけたことによるのである。

また、自治体職員（社会教育・生涯学習関連行政の担当者）や看護師といった職業の人の参加があったことが注目される。参加の動機としては、自らの「ホスピタリティ能力の向上」を目指す、ということが表明されていた。

さらに、高校の教員で実際に観光に関する授業を担当している、という人の参加もあり、多彩な受講者の参加が得られた。

第二に、多彩な講師陣の配置、ということが挙げられる。外部からの講師を多数配置しているのだが、接客に関わる講義、地域の基幹産業として観光業に携わっている人の実践に基礎づけられた「ホスピタリティ」向上の課題、地域作りの在り方など、様々な角度から内容豊かな講義がなされた、ということができよう。

個々の講師についてみると、一般的には高額の講師謝金を支払う必要がある場合も多いのだが、「大学が主催する事業だから」ということで極めて少ない講師謝金で講義を引き受けていただいている。まさに大学だからこそできる講座となっているのである。

第三に、学習方法として、「参加体験型学習」の学習方法が追求されていることが挙げられる[5)]。先にも簡単に触れたが、16年度の総括の中で、受講者から「参加者どうし交流することができるように配慮して欲しい」という要望が出されていたことを重視し、また講義を拝聴するだけの「うけたまわり学習」に終始するのではなく参加者同士が意見交換を積極的に行うため、「グループ学習」の形態を取り入れた。講師による講義は前半の1時間とし、後半は30～40分程度グループで討議し、その結果を発表し合う、ということにしたのである。

また、グループとして弘前や津軽・青森地域の観光に関わって改善すべき点を考え、政策提言することを課題として設定した。こうしたグループ学習は、「参加体験型学習」として有効に機能し、大きな成果を上げた、ということができる[6)]。

3, 受講者のアンケートから

受講後、受講者に対して行ったアンケートから、若干の特徴的な点を指摘しておきたい。

第一に、全体として高い評価を得た、ということである。受講して「大変満足」が24パーセント、「やや満足」が70パーセントで、「普通」以下の低い評価の回答はほとんどない。

第二に、実践的な講義に対して評価が高かった、ということである。10回の講師による講義について、各回ごとに評価を尋ねたところ、「大変役立った」という回答と「少し役立った」とう回答の合計はいずれも５～６割をこえ、中でもＪＡＬ乗務員による「ホスピタリティ産業における接遇」では70パーセントが「大いに役立った」と回答しており、さらにＮＴＴ人材育成専属講師による「電話応対マナー」では74パーセントが「大いに役立った」と回答している。

回答者数は必ずしも多くはないし、回答者全員が各回に出席している訳ではないので、厳密にその有意性を検証する必要はあるが、概ねこの傾向は確認することができる、と考える。

Ⅳ，今後の大学開放とキャリアアップ教育

1，大学教育の基本的な性格付け

大学が社会的に果たすべき役割については、様々な角度から論じられている。ここでは、キャリア教育に関連づけて、今後の大学教育のあり方について論点整理を試みたい。

大学が高等教育機関として果たしている役割には、後述する社会的専門労働者の養成という役割がある。国家資格などに象徴される、社会的に通用する「資格」を取得することができるのが大学であり、そこで単位を修得することで資格が取得できる、ということになる。医師免許のように、免許それ自体は国家試験によって与えられるにしても、大学で教育を受けることが前提となる場合も含めてである。

こうした「資格」に限定されることなく、大学が社会に有用な人材を送り出すための重要な役割を果たしている、ということは否定できない。

2，大学教育に求められる「人材育成」

今日、大学や短大・専門学校への進学率は約50パーセントに達している。半数が進学するという意味では「大学進学」は社会的に一部の人のものということではなくむしろ多数者のものとなった、ということである。

社会の中で職業に就き、社会的な労働・生産・流通を担う人々もやがて半数は「大学卒」によって占められる、ということになる。では大学は「人材」を社会的に育成し社会に「供給」しているといえるのだろうか。

この問に対して軽々に回答を与えることはできない。とはいえ、「高等教育機関」として、中等教育とは異なった条件の下で教育が展開されているのであり、それは中等教育では実現が困難な（不可能ということではないかもしれないが）「質」での教育である、ということができよう。

勿論、今日では一般的に「学力低下」の傾向が指摘されているところであり、また、学生

のライフスタイルが「学問」とはほど遠いものとなっている状況にある。バイトで忙しいとか（かつての苦学生とは違って生活のためにバイトするというのではなく、遊ぶためにバイトする、という傾向が強い）、携帯電話でメールをやりとりしたりインターネットで様々な情報の入手にいそしむ、といったことに重点的に時間が割かれる傾向が強いのである。

こうした状況からすれば、必ずしも「高等教育機関」で学び社会的に有能な人材として育成される、ということにはならない。

とはいえ、中等教育では実現しがたい高い「質」の教育が追求し得る、という点だけは確認しておきたい。また、多くの学生が大学で「学問」に触れ、それまでの世界観を再構築して科学的な世界観を身につけているのであり、また、自立的に学習することを身につけている、と言えるのではないだろうか。

3, 生涯学習の場としての大学教育のとらえ直し

(1) リカレント・キャリア教育の今後

大学教育が果たすべき役割は、大局的にみれば「学問の継承」と「人材育成」という２つの面に集約されるのではないだろうか。

「高等教育機関」という社会的位置づけから、「学問の府」として蓄積された様々な研究成果が若い世代に継承されることになる。大学教員に即してみると、それまで在籍していた教員が定年退官したり他大学に他出することもまれではなく、それにともなって一方では「研究の断絶」が危惧される面があり、他方では新たな研究課題・研究方法を追究している人を迎え「あらたな研究のスタート」を迎える、ということになる。

このように、より具体的にみれば大学の中での（世代間）交代も進行しているのではあるが、基本的には大学という組織の単位で「学問の継承」が図られている。

一方、学生は大学卒業後、様々な場面で社会人として活動することになる。大企業や中小企業などの民間企業や自治体などの行政職員として勤務する、といった例も多い。

こうした職業選択において、大学で単位取得が可能な資格を必要とする場合も多いのだが、民間企業などでは必ずしも大学で必要な単位・専門的知識の習得を絶対的な必要条件として設定していない場合も多い。また、研究所などへの勤務を前提とした採用では、大学院の修了者を前提とする場合もあるのだが、今のところ絶対的な数は多くはない。

さて、大学で様々な専門的知識を習得して社会人となった場合、現代社会の特質としてそうした専門的知識が比較的早い時期に陳腐化してしまう傾向にある、ということが指摘される。周知のように1965年にユネスコで「生涯学習」が議論されたとき、生涯学習の必要性はまさに大学等の学校教育で習得した知識が社会の急激な変化の中で早期に陳腐化する、という社会認識に基礎づけられていたのである。

このような専門的知識の「陳腐化」は、学問領域によっても異なるとはいえ、おおよそすべての領域で不可避的に進行していることである。したがって、社会人として経験を積み重ねる中で新たな知識・知見を蓄積していくとはいえ、研究方法の変化や研究成果の蓄積にともなって、改めて大学で再度教育を受ける必要性が生じてくるのである。

このように捉えたとき、卒業後再度大学で教育を受けるというリカレント教育は、個人のニーズであると同時に雇用する企業・行政にとっても死活の問題になりつつある。

また、リカレント教育とは区別されるところで、新たな職業・職場を求めるものとして、あるいは同じ企業の中でもより良い労働条件を獲得するためのものとして、キャリアアップ教育も近年注目されてきているところである。そのキャリアアップ教育についても、大学が提供できる「教育機会」は、多様なものが存在すると考える。

(2)「大学開放」の視点からの「大学教育」

大学教育が今後どのように変容していくのかという点については、必ずしも明確な道筋が存在しているとは言い難い。しかし、ここでは「大学開放」にともなって、大学教育が多様化することの可能性について考えてみたい。

先に触れたように、大学がリカレント教育やキャリア教育の場として展開すること自体が大学教育を変容させる重要な要因として機能すると考えられる。社会人として実際に勤務している人、あるいは勤務経験を持つ人々が「学生」として学ぶということで、当然ながらそうした「学生」の問題意識や蓄積した知識・経験・判断力・価値観などを考慮した授業の組み立てが必要となってくる。

また、可能性としては、学生どうしの交流が基礎となって、学生総体が「学習力」を向上させる、ということも考えられる。

一方、情報通信システムを利用した教育システムは、すぐれて自立的な学習を必要とする、と考えられる。対面授業の場合には教室にとどまって「教員の教育活動に参加する」ということが前提となり、実際には学生が講義に集中しないで教育効果も上がらないといった状況があり得るのではあるが、e-learningの場合、自立的にアクセスし、自立的にコンテンツを読み解く努力をする、ということが求められることになる。そうした継続的な努力が、今日の「学習力」が低下した多くの学生にとってどこまで有効な教育学習方法として機能し得るのであろうか。

勿論、一部にはこうした情報通信手段を活用して多くの情報を入手し、学習や日常生活の営みの中で多様な活用をしている人々が多いことも事実である。e-learningを使いこなして確実に学習効果を上げる学生も決して少ないものと考える。

しかし、「情報の入手」ということと「学習する」ということとは決して同じものではない、と考える。

Ⅴ，結び

この小論では、「観光ビジネススクール『はやて』」の実践をふまえながら、近年急速に注目されるようになってきているキャリア教育に関して「大学開放」の視点から、いくつかの論点整理を試みた。

結論として、今後キャリアアップ教育やリカレント教育を大学が積極的に担うことが社会的に必要とされているということ、大学が「高等教育機関」として持っている固有の「高度な教育機能」が積極的に「公開」されるべきである、という点を明らかにできたと考える。

〈注〉

1）「大学開放」については様々な議論があるが、ここでは小池源吾の整理を紹介するのにとどめたい。小池源吾「生涯学習社会における大学」（鈴木真理・佐々木英和編著『社会教育と学校』、第９章、学文社、2003年）。しかし、小池の場合も、キャリア教育については充分踏み込んだ議論をしていない、と考える。

2）弘前大学の実践をふまえて、筆者は別の機会にも「大学開放」について触れているので参照されたい。拙稿「大学開放の将来展望」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第７・８合併号、2005年）。

3）「観光ビジネススクール『はやて』」の平成16年度の概要については、「観光ビジネススクール『はやて』報告」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第７・８合併号、2005年）を参照されたい。

4）いわゆる「2007年問題」への対処として、一部では正規職員の雇用を増大させている企業はあるが、全般的な傾向として非正規職員の比重を増大させながら正規職員には「競争」を強いる、といったことが今後も強まるものと考える。その場合、非正規職員の比重を増大させる意味として、単に「量的な代替」を図るだけでなく、「質的にも正規職員の代替」を図る傾向が強まるものと考える。

5）「参加体験型学習」については様々な研究成果が出されてきている。例えば新藤浩伸「ワークショップの学習論」（日本社会教育学会編『成人の学習』、東洋館出版、2004年などがある。

6）「学習の成果」や学習活動の「評価」について、近年関心が高まってきている。そのことは、一面で「大学評価」などにも見られる様々な場面で、とりわけ職場において「成果主義」か導入され、給与や労務管理に反映されるようになってきたことと関連がある、と考える。しかし、「教育ー学習」の論理としても、「学習効果」や「教育学習活動の評価」をどのよに行うのかということは、重要な研究課題として設定し得るものと考える。この点ついては、別の機会に詳しく検討してみたい。

生涯学習への取組みの課題
－「健康」に関する公開講座等を実施して－

生涯学習教育研究センター　**菅　　世智子**

１．はじめに

キャリアアップやリカレント教育、あるいは純粋な知識の取得など、生涯を通じて学習したいという市民の要望は高く、これに応えるべく、自治体や大学、新聞社、出版社等が公開講座や講演会、ワークショップ等さまざまな企画で取組んでいる。国立大学は法人化後、社会貢献がその役割の一つに明記され、特にその地域への具体的な貢献が求められている。本学でも、地域発展のための地域企業との共同研究や共同開発といった本学の科学的資源を背景とする貢献と、本学からの知の発信による地域貢献として、各学部と本センターが公開講座等を市民対象に開催している。

さて、この本学からの知の発信の観点で留意すべきことは、特に記すまでもなく、すでに専門的職業に就いている人を含めて、市民は本学に何を、どのように発信してもらいたいかということを十分に把握し、それに応えるとともに、さらに市民にとって有益な情報を積極的に提供することである。

そこで、これまで筆者が関わった本センター主催の「健康」に関する講演会と公開講座を振り返って、そこから得られる今後の課題等を探ってみたい。

２．平成16年度と17年度の「健康」に関する取組み

表１に、平成16年度と17年度に本センターが主催した「健康」に関する講演会および公開講座を示す。

表1．平成16年度と17年度の「健康」に関する講演会等

企画番号	名称等（カッコ内は講師名）	開催地	開催日時	募集人員
1	講演会「生活習慣病を考える」 （参加費：無料） 1．青森県における「生活習慣病」 （弘前大学医学部社会医学講座教授　中路重之） 2．「肥満と糖尿病」 （弘前大学医学部内科学第三講座講師　小川吉司）	五所川原市	平成16年 10月14日（土）	50名
2	講演会「がん予防５つの目標」 （参加費：無料）	むつ市	平成17年 9月9日（金）	50名

	（(弘前大学医学部老年科学講座教授 水島　豊）			
3	公開講座「健康な暮らしについて考える」 （参加費：5000円） 1. 青森県の寿命－なぜ短命なのか－ （弘前大学医学部社会医学講座教授 中路重之） 2. 肥満と糖尿病 （弘前大学医学部内科学第三講座講師 小川吉司） 3. 食生活と運動 （弘前大学医学部社会医学講座講師 梅田　孝） 4. よい眠り－心からくる睡眠障害、病気としての睡眠障害－ （青森芙蓉会病院医師　村上拓也） 5. 豊な老後－豊な老後を過ごすために必要なこと－ （地域医療研修センター副センター長 八森　淳）	三沢市	平成 17 年 9 月 21 日（水） 9 月 28 日（水） 10 月 5 日（水） 10 月 12 日（水） 10 月 19 日（水）	40 名
4	講演会「生活習慣病を考える」 （参加費：無料） 1. 食と健康 （弘前大学医学部社会医学講座講師 梅田　孝） 2. 肥満と疾病 （弘前大学医学部内科学第三講座講師 小川吉司）	十和田市	平成 17 年 10 月 15 日（土） 10 月 22 日（土）	50 名

３．公開講座等のアンケート結果

上記講演会ならびに公開講座の内容については、本センターの公開講座・講演会の案内を参照していただきたい。ここでは、講演会等が終了してから参加者から提出してもらったアンケートの結果について分析する。

1) 参加人数

以下に、今回分析した４つの講演会・公開講座の参加人数を示す。単発の講演会はその参加人数を、複数回で構成した公開講座については最多の参加人数であった回の人数としている。

表1. 参加者数

企画番号	1	2	3	4	計
参加人数	50	33	15	25	123

また、今回分析した９回の開催日の個々の参加人数をのべ参加人数として以下に示す。

表2. のべ参加人数

企画番号	1	2	3	4	計
のべ参加人数	50	33	68	31	182

2) アンケート回収率

全123名の参加者で、アンケートに答えてくれた人数を以下に示す。

表3. アンケート回収率

企画番号	1	2	3	4	計
参加者数	50	33	15	25	123
回答者数	46	30	15	19	110
回収率(%)	92	91	100	76	89.4

3) 参加者の年齢分布

複数回で構成した公開講座については、最多参加人数であった回を参加者数とした場合の全参加者数は123名である。この内訳を図１に示す。なお、無回答が２あった。

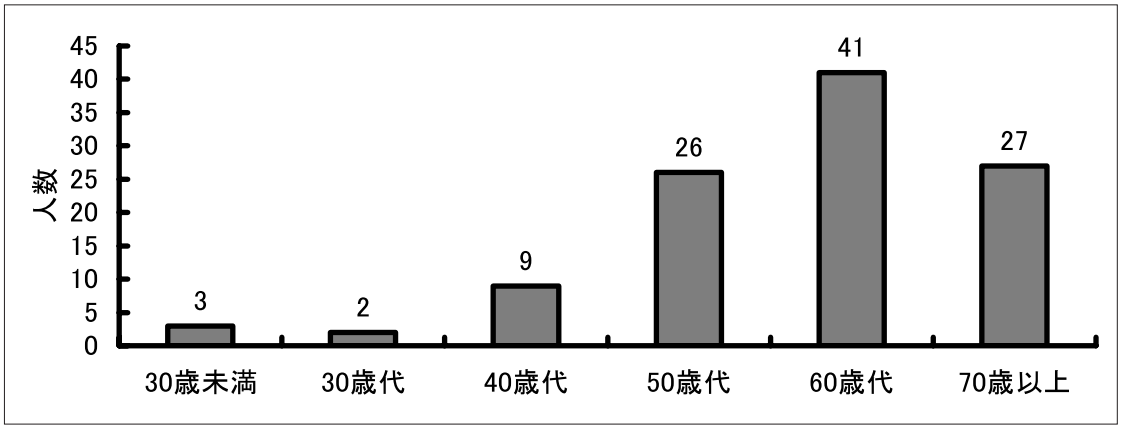


図1. 参加者の年齢分布（アンケート回答者のみ）

表4. 各講演会・公開講座参加者の50歳以上の割合（%）

	50 歳以上	60 歳以上
1	84	69
2	83	47
3	93	60
4	94	78

表４から、むつ市での講演会（企画２）と十和田市での講演会（企画４）の60歳以上の参加者の割合が大きく違っているので、以下に、それぞれにおける年齢分布を示す。

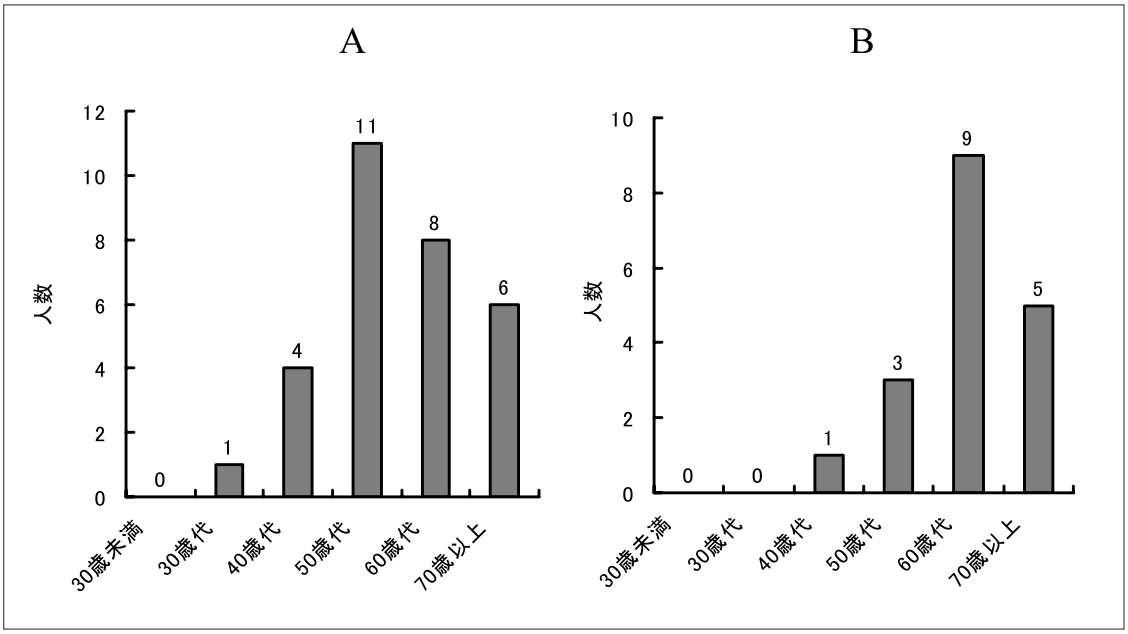


図2. むつ市での講演会（A）と十和田市での講演会（B）の参加者の年齢分布

4) 参加者の性別

表５は今回分析した講演会・公開講座に参加した人の性別を示す。

表5. 参加者の性別（アンケート回答者のみ）

	男性	女性	無回答
人数	28	49	33

さらに、今回分析した４つの講演会・公開講座での性別の分布を比較してみた。

表6. 各講演会等の参加者の性別

企画番号	1	2	3	4	計
男性/女性	13/27	9/7	4/6	2/9	28/49

5) 講演会・公開講座の評価

表７は、講演の内容について参加者全員の評価である。この表での回答数は、企画 (1) での２名の講師を含んでおり、参加人数とは異なっている。

表7. 講演の内容についての評価

評価	5	4	3	2	1	無回答	計
回答数	131	71	5	0	0	4	211

5　大変良かった
4　良かった
3　ふつう
2　あまり良くなかった
1　全く良くなかった

図３では講演の内容について、それぞれの回の評価を標準化している。

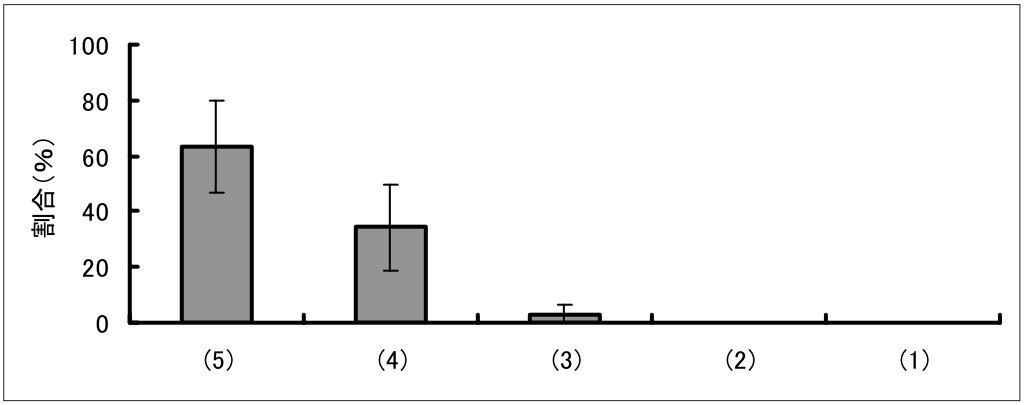


図3. 講演の内容についての評価

なお、それぞれの平均値と標準誤差はｎ＝10で、評価 (5)63.4±16.3%、評価 (4)34.3±15.4%、評価 (3)2.6±3.9%、評価 (2)0%、評価 (1)0%である。

表８は講師の説明等についての評価である。

表8. 講師の説明等についての評価

評価	5	4	3	2	1	無回答	計
回答数	137	64	7	0	0	3	211

5　大変良かった
4　良かった
3　ふつう
2　あまり良くなかった
1　全く良くなかった

図４では講師の説明等についてそれぞれの回の評価を標準化している。

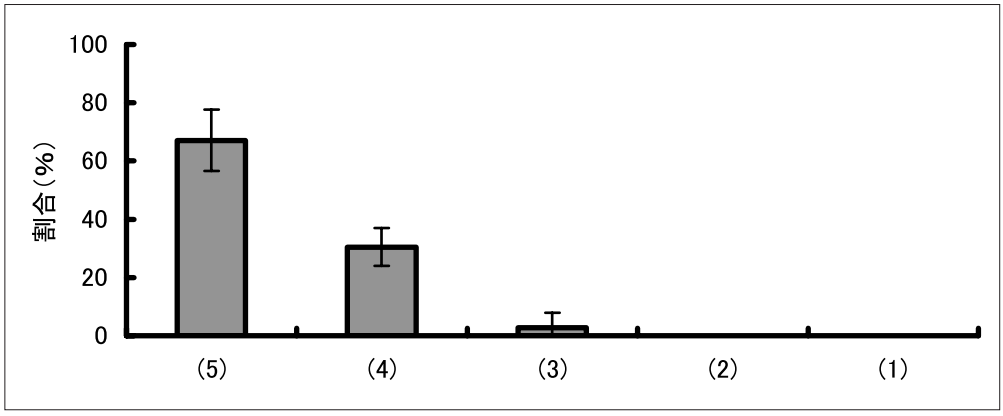


図4. 講師の説明等についての評価

なお、それぞれの平均値と標準誤差はｎ＝10で、評価 (5)67.1±10.5%、評価 (4)30.5±6.6%、評価 (3)2.7±5.2%、評価 (2)0%、評価 (1)0% である。

6) センターの対応

表９は、今回分析した本センター主催の講演会・公開講座に対する本センターの対応についての評価である。なお、企画 (1) は同日に２名の講師による講演であったので、これに対する評価は１回となるため、全評価回数は９回である。

表9. 本センターの対応についての評価

評価	5	4	3	2	1	無回答	計
回答数	69	74	16	2	0	4	165

5　大変良かった
4　良かった
3　ふつう
2　あまり良くなかった
1　全く良くなかった

図５では本センターの対応についてそれぞれの回の評価を標準化している。

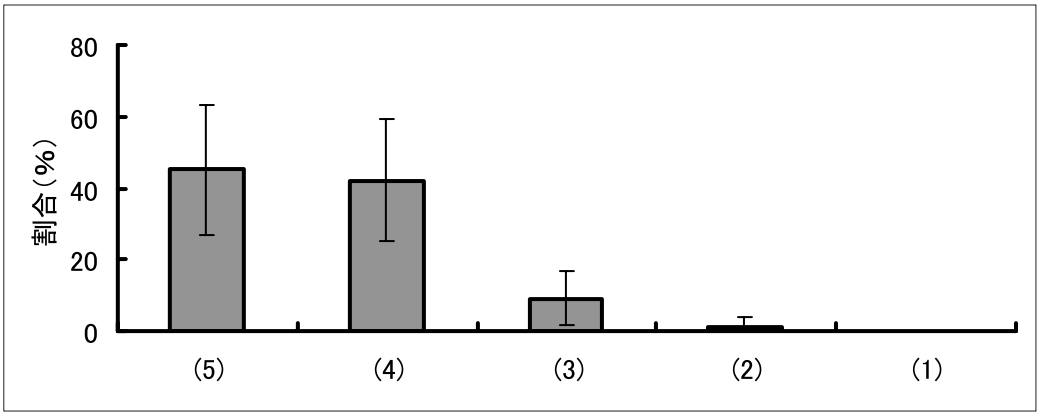


図5. 本センターの対応についての評価

なお、それぞれの平均値と標準誤差はｎ＝9で、評価 (5)45.2±18.1%、評価 (4)42.1±17.1%、評価 (3)9.1±7.5%、評価 (2)1.0±3.0%、評価 (1)0%である。

４．公開講座等のアンケートの分析と考察

1) 参加人数について

いずれの講演会、公開講座も、会場や資料の準備のために参加人数を約50名と制限している。これに対して、五所川原市での講演会（企画１）が50名と、希望どおりであったが、その他の３つの講演会、公開講座とも希望人数を大きく下回った。ここで、３つの傾向が見えてくる。第一に、講演会の方が公開講座よりも多く参加している傾向がある。第二は、第一の分析と重複するかもしれないが、単発のものは、２回から５回の複数回で構成されるものよりも多く参加している。第三は、複数回で構成されるものは、全回数が少ない方が多く参加している。これらの３つのことは、講演会は単発あるいは２回で終了し、公開講座は５回で構成されていたため、どちらが参加人数に影響する要因になっているかは明らかではないが、全５回で構成した三沢市での公開講座（企画３）は参加人数が最も少なかったことから、複数回の企画に対して参加しようとする人数は限られるのかもしれ

ない。この解釈の妥当性については、やはり当日のみで終了するもので、「健康」とは間接的に関連する、本センター主催の公開セミナー「医療と倫理」（平成17年１月22日、青森市、参加　64名、平成17年11月19日、八戸市、参加48名）が比較的重いテーマであるにもかかわらず、いずれも多くの参加人数を得ていることが支持している。しかし、開催した地域がそれぞれ異なっているので、これのみを参加人数を左右する要因とすることはできない。さらに、企画（3）のみが有料であったことも、参加人数が少なかった原因として考えられる。

2）アンケートの回収率について

アンケートの回収率は、平均89.4±10.0%（平均±標準偏差）であった。企画（3）は回収率が100%で突出している。これは参加人数が最も少なかった５回シリーズの公開講座の中の一つであり、参加人数あるいは企画の種別とアンケート回収率の関係を考えさせるが、同様な企画（4）の回収率は低いので、これらの関係についてはわからない。

3）参加者の年齢分布について

図１から明らかなように、参加者の年齢は50歳代、60歳代、70歳以上に集中しており、これらの年代層（50歳以上）だけで、全体の参加者の87%を占める。また、60歳代以上でみると、63%で過半数を大きく超えている。特に60歳代は多く、全参加者の38%である。このこと自体に問題があるということではないが、若い年齢層をも取り込む活動が必要である。

個々の講演会・公開講座で参加者の年齢を比較してみると、表１でみられるように、いずれの企画でも50歳以上の割合は80%を超えており、「健康」に関する講演会等に参加する人の80%以上が50歳以上であるといえる。さらに、60歳以上の割合で特徴的なことは、企画（2）の47%と番号（4）の78%の違いである。企画（2）と企画（4）についてそれぞれの参加者の年齢分布を見ると（図２）、（企画２）では明らかに左方に移動していることがわかる。

ここで、この講演会に比較的若い人が参加した理由を考えてみると、むつ市という地域性、講演会という種別、開催時期、そしてテーマ「がん予防５つの目標」の４つのポイントがある。講演会という種別については、番号（1）では60歳以上が69%であるので、可能性は少ない。開催時期については、企画（2）、企画（3）、企画（4）はいずれもほぼ同時期に開催されている。地域性と題名については、今後、別の講演会等をむつ市で実施することや、別のテーマで開催することで検証できるが、他の３地域ではほぼ同様の分布を示していることから、講演のテーマが要因ではないかと思われる。

4）参加者の性別について

参加者の性別調査では、まず、女性が多く、男性のおよそ２倍であることがわかる。ここで無回答の数が多いことが目に付くが、これは設問として置いた部位が目立たず、見落とした可能性がある。

また、ここでも企画（2）での参加者は男性の方が女性よりも多く、他の講演会等とは異なる性別分布を示している。年齢分布で考察したように、「がん予防５つの目標」は男性

の関心を高めたことが考えられる。

5) 講演会・公開講座に対する評価結果について

講演会や公開講座が参加した市民にとってどのように評価されるかについては、講演会等を開催するに当たって最も気がかりなことである。講演の内容が十分に参加者の興味を引くもので、講演を聴いた後の満足感が大きければ、会場での、あるいはその前の対応等に、たとえ問題があったにしても、それらをカバーしてくれる。勿論、そのような不手際等はないにこしたことはないが。また、もし、評価がよくなければ、次の講演会等の開催に向けた注意点等、多くの示唆を与えてくれる。

今回は、上記４つの各講演会と公開講座のすべての回について、講演の内容と、講師の説明はどうであったかを質問し、その評価結果を分析した。今回分析した講演会・公開講座は、回数としては９回であり、参加者の述べ回答数は211である。しかし、企画（1）の講演会は２名の講師による講演で構成されていたため、講師数の述べ人数は10名である。

表７、８および図３、４からは、平成16年度と17年度に本センターが取組んだ「健康」に関する講演会と公開講座はおおむね好評であったと思われる。特に、大変良かったと回答した参加者は、講演の内容については63.4±16.3%（平均±標準偏差、n＝10)、講師については67.1±10.5%（n＝10）であり、ほとんどすべての回で、高い評価を得たことがわかる。また、講演の内容と講師の説明等に対する評価はほぼ一致していることも興味深い。

6) センターの対応に対する評価結果について

講演の内容や講師についての評価に較べると、これらの企画と実施における本センターの対応に対する評価はやや低い。数値のみみれば、およそ87%の参加者が、本センターの対応については肯定的な評価をしているので、大きな問題はないと思われるが、大変良かった（評価５）と良かった（評価４）の割合を標準化して得られた値は（平均値と標準偏差）はそれぞれ、45.2±18.1%、42.1±17.1%であり、標準偏差の数値は大きい。このことは、それぞれの企画あるいは回ごとの評価にばらつきがあったことを示している。センターの一人として、どれも同じように準備し、対応しているつもりであるが、反省する必要がある。

５．おわりに

筆者は本センターの専任教員に任命されてから、２年を経過したばかりである。この間、本センターの取組みの中の、特に、「健康」に関する講演会・公開講座を企画・実施してきた。特に「健康」に関する生涯学習に力点をおいた理由は、筆者が２年前まで、医学部医学科の教員であったことと、市民にとって最も関心のある事柄の一つは「健康」であると推測されたからである。

今回の分析は、「健康」に関する講演会と公開講座に絞ったため、全部で４企画（講演回数は10回）と、分析する数としては十分とはいえない。また、筆者自身に、本学の地域へ向けた知の発信の全体像がまだ十分には把握できているとはいえない。しかしこれらの批

判は承知の上で、何か、今後の活動に向けたヒントが得られるのではないかとの期待をもって分析してみた。分析の結果から得られたことは、本センターが市民にとって有意義なものになると確信をもって提供するにもかかわらず、参加を希望する人は決して多くはないということである。また、単発で実施される講演会等により参加希望があること、テーマによっては比較的若い年齢層の人も興味をもって参加してくれることなど、可能性としてではあるが、見えてきたように思われる。これらの結果を今後の活動に生かすつもりである。

観光ビジネススクール「はやて」（平成17年度）報告

生涯学習教育研究センター　**藤　田　昇　治**

１，はじめに

平成16年度に引き続き、今年度も「観光ビジネススクール『はやて』」を実施し、多大な成果を上げることができた。定員30名に対して多数の申し込みがあり、結果として33件（法人としての参加も含めて）の受け入れを行った。

昨年度の成果をふまえつつ、さらに今年度に向けていくつかの新たな試みがなされたが、その多くが貴重な成果を上げることができた、と考える。中でも、講座の受講者がグループごとに、弘前・津軽・青森の観光の在り方について具体的な提言をとりまとめたことは、講座参加者にとっての成果であると同時に、観光業をはじめとする多くの人々にとって有意義なものである、と考える。詳細は次ページ以降を参照されたい。

こうした「ビジネススクール」の事業は、「大学開放」という視点からみても重要な意義をもつものであり、これまでの成果をふまえ、地域に根ざした大学作りを展望する上で、多くの教訓が蓄積された、と考える。

２，事業の概要

(1) 講義と日程

今年度は６月23日からスタートし、10月27日に終了した。10名の講師による講義とワークショップ・成果発表会、その他「弘前市内見学ツアー」を実施した（詳しくは次ページ以降を参照）。

今回も、「接遇」に関して日航の職員による指導、電話の応対についてＮＴＴ人材育成専属講師による指導などを取り入れながら、多彩な顔ぶれによる講義が行われた。それは観光業に焦点が当てられながらも、地域の活性化や地域づくりの実践などを含む、きわめて内容の豊かなものであった。

(2) グループ活動の重視

今年度新たな試みとしたことは、参加者をグループ分けし、グループ単位での交流・討議・実践を重視したことである。

昨年度も、単に講師の講義を「承る」だけでなく、質疑・討論の時間を設けたり、「接遇」の在り方においては「実習」の要素も取り入れたのであるが、参加者からは「参加者どうしの交流をもっとしたい」という要望が出されていた。

こうした経過の中で、基本的に「１時間の講義、休憩後グループでの討議」という学習形態を採用した。

また、４つのグループに分けてそれぞれ観光ホスピタリティ向上の課題を設定し、グループとして具体的な提言をとりまとめることをめざしその成果を最終日の「成果発表

会」で発表する、というグループ学習を試みたのである。「座学」ないし「うけたまわり学習」の枠を越え、グループごとに主体的に資料やデータを収集し、自分たちの考えをまとめ、政策提言する、ということをめざしたのである。

３，事業の成果と課題

今回の事業の成果について、以下の３点にしぼって触れることとしたい。

(1) ホスピタリティ能力の向上

様々な地域から訪れる観光客に対して、「ホスピタリティ能力」をいかに向上させるべきか。また、自分が現在就いている職業・仕事に即して、いかに「ホスピタリティ能力」を向上させるのか。

この問に対して一人一人の参加者が自分なりの回答をひきだすことができたのではないだろうか。それは次ページ以降に紹介しているアンケートや「成果発表」に如実に表れている、と考える。

(2)「参加体験型学習」の意義

先に述べたように、昨年と比較して「参加体験型学習」として「グループ学習」という学習形態を新たにとりいれたことは、大きな成果を上げた、と考える。それは、個別的な事例ではあるが、昨年度に引き続き参加したＯ氏や現職の高校教員で観光に関する授業を担当しているＨ氏からの聞き取りでも明らかである。年齢・職業・生活歴・問題意識等が異なる人々が「参加体験型学習」をすることで、問題意識・学習意欲が触発されより鮮明となり、学習の成果が共有されることで共同学習としての学習効果も実現している、ということである。

(3)「大学開放」の今後の展望

「観光ビジネススクール」の成功は、「キャリアアップ」を目指す職員・住民のニーズが広範に存在していることを示している。また、民間企業などでは充実した講師陣の確保と低料金を両立できるものではない。大学であればこそ可能となっている事業なのである。さらに、図書館の利用や教員による学習アドバイスなどは今後さらに活用されるべきものであろう。そしてこうした事業の展開は、「研究、教育、地域（社会）貢献」を目指す上で、「大学開放」を推進する上で様々なヒントを示している、と考える。

４，結び

昨年度に引き続き実施された「観光ビジネススクール」の成果は、参加者一人一人に蓄積されるとともに、事業にとりくんできた青森県文化観光部および弘前大学の関係者にも蓄積されている、と考える。学習の成果が実践にうつされるとき、それは確実に職場・地域を変える動きとなっていき、「ホスピタリティ」の向上を促進していくものとなる、と考える。

(1) 講義の実施（実施回数　11回）

時間：18時30分～20時30分
場所：弘前大学総合教育棟人文学部多目的室，大会議室　他

年月日	講　　義　　名	講　師　職　・　氏　名	受講者数
6/23 （木）	青森県の観光について	弘前大学人文学部　助教授　　森　樹男 青森県観光推進課　総括主幹　秋田佳紀	３１名
6/30 （木）	サービス接遇の基本	弘前観光コンベンション協会 専務理事　飯塚和剛	２５名
7/7 （木）	ホスピタリティ産業における接客	ＪＡＬ客室乗務員　柴田佳枝	２６名
7/14 （木）	電話応対マナー	ＮＴＴ人材育成専属講師　秋元宏子	２４名
7/21 （木）	牛角躍進の裏側 ～マニュアル以上の接客術～	レインズインターナショナル 牛角研修担当　松井基展	２４名
7/28 （木）	ワークショップ	指導助言：弘前大学人文学部 助教授　森　樹男	２１名
8/25 （木）	地域における観光開発 ～ウェスパ，つるつるワカメなど～	ふかうら開発　代表取締役専務　石澤　優	１９名
9/1 （木）	消費者ニーズに対応した産地戦略	伊勢丹ＭＤ統括部支店催事部 物産展担当長　髙橋貞男	２０名
9/8 （木）	宿泊施設におけるホスピタリティ	アソベの森いわき荘 常務理事・総支配人　齊藤　浩	２２名
9/15 （木）	ふるさとの宝をみつけよう	東日本旅客鉄道株式会社秋田支社 営業部長　石塚友寛	１９名
9/22 （木）	【公開講演会】 飛騨高山の観光とまちづくり	観光カリスマ　飛騨高山観光協会会長・高山商工会議所会頭　蓑谷　穆	２１名 一般 ５４名
10/27 （木）	成果発表会 グループ単位で探究してきた地域の観光振興などの研究課題について，成果発表及び質疑応答を行った。 修了式	弘前大学人文学部　助教授　　森　樹男 弘前大学生涯学習教育研究センター 助教授　　藤田昇治 青森県観光推進課　総括主幹　秋田佳紀 修了式の挨拶，修了証書授与：浅野センター長	２４名

(2) 現場における演習等の実施（実施回数２回）

①時間：10時00分～15時30分
場所：藤田記念庭園，青森銀行記念館　他

年月日	講　　義　　名	講　師　職　・　氏　名	受講者数
7/9 （土）	弘前市内見学ツアー 洋館を中心とした観光スポット巡り，レストラン山崎にてランチ，土手町周辺の観光スポット巡り	ボランティア観光ガイド　アパ・テ・ドラ 奈良祐子 立会人：弘前大学人文学部 助教授 森　樹男	１２名

②時間：18時30分～20時30分
場所：ホテルニューキャッスル

年月日	講　　義　　名	講　師　職　・　氏　名	受講者数
7/19 （火）	ホテル実習（２時間コース）	ホテルニューキャッスル 料飲部支配人　三浦　勝 立会人：弘前大学人文学部 助教授 森　樹男	１０名

Ｈ17「はやて」成果発表会

観光客にやさしい街

～カギは我々住民が握っている～

TEAM　KIND

山　前　雄　義　　小山内　照　代
山　崎　智　美　　工　藤　敦　史
長谷川　善　弘

はじめに

私たちが観光地へ行ったとき，優しく対応してくれた人がいれば，その街全体の印象が良くなるのではないか。また，住民の対応如何によって観光客やお客様が，その街の善し悪しを決めるのではないか。そして，観光客にやさしい街を創るためのカギは，我々住民が握っているのではないかと考え，住民の観光客への意識と対応という観点で調査・研究を行った。

調査

私たちが住む津軽は観光客にやさしい街なのか。

資料を調べるより，直接住民へ調査したほうが，観光客（他人）に対しての対応レベルが把握できるのではないかと思い，次の３つの調査を行った。

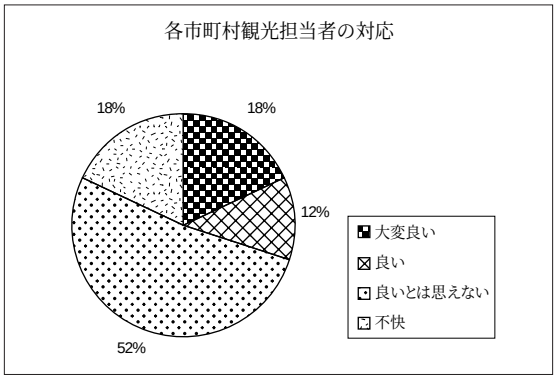
調査その１

・担　当：山崎　智美
・方　法：電話で聞き取り
・内　容：アクセス方法、観光名所、名産・土産等についてどのように回答するか
・対　象：各市町村（津軽一円）の観光担当者
・件　数：17件

「大変良い」「良い」「良いとはいえない」「不快」の４段階に分け評価をした。

結果は「大変良い」　３件18%
　　「良い」　２件12%
　　「良いとは思えない」９件52%
　　「不快」　３件18%

である。



良かった例

親しみやすい話し方（質問しやすい感じ）

ニーズにあった回答をしようとする意識がみられた

悪かった例

冷たい対応（最初にパンフレットを郵送するから・・・　）

調査その２

・担　当：工藤　敦史
・方　法：聞き取り
・内　容：アクセス方法、観光名所、名産・土産等についてどのように回答するか
・対　象：道の駅の担当者
・件　数：６件

場　所	対応者	質　問	評　価
弘前市 サンフェスタいしかわ	売　店	弘前駅前までのアクセス	良いとは言えない
	電子掲示板有り 弘前駅前までを数名で相談しながら地図を使って説明，少し内容が難しい		
鰺ヶ沢町 海の駅わんど	受　付	町の名産・特産物	良いとは言えない
	受付有り 町の名産・特産物		
旧森田村 アーストップ	売　店	周辺アクセスと名前の由来	不快に感じた
	受付有り（対応者不在） 売店の人が対応，しかし質問について「わかりません」と即答		
田舎館村 弥生の里	売　店	弘前城までのアクセス，観光スポット	不快に感じた
	電子掲示板有り 質問に対し「掲示板を見てください」その後口頭により説明		
鶴田町 鶴の里あるじゃ	売　店	たけのこの里へのアクセス	良いとは言えない
	対応者が質問に対し理解できず（地名を質問，お菓子と勘違い）		
旧浪岡町 アップルヒル	売　店	立佞武多の館へのアクセス周辺の観光スポット	良い
	立佞武多の館へのアクセスは良かった 周辺の観光スポットについて期待していたコメントは聞けず		

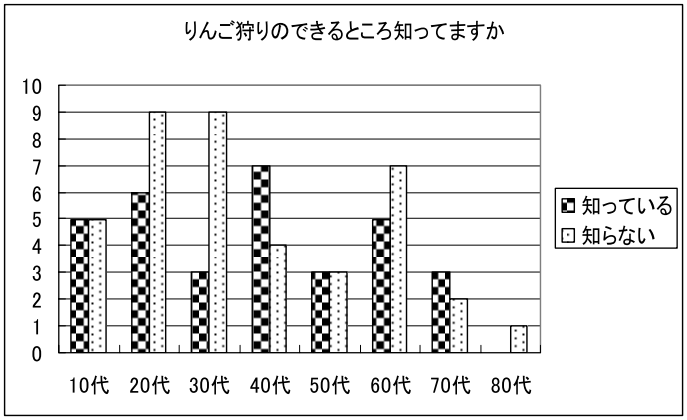
調査その３

・担　当：小山内　照代
・方　法：インタビュー調査
・内　容：アクセス方法（りんご公園はどこにありますか）
・対　象：任意
・件　数：72件

10代から80代まで「知っている」「知らない」の２つに分け評価をした。
結果

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代	計	割合
知っている	5	6	3	7	3	5	3	0	32	44%
知らない	5	9	9	4	3	7	2	1	40	56%
計	10	15	12	11	6	12	5	1	72	

結果から30代，20代に「知りません」という回答が多かったことには，驚きを感じ，これからの時代の中心世代に関心を持ってもらいたいと感じた。



３つの調査結果の「評価」は担当者の主観です。

３つの調査結果から，観光客・観光地に対する意識の低さ，そして，観光に対する関心の低さというものがわかる。また，インタビュー調査では観光産業に携わらない住民のコミュニケーション能力の低さが浮き彫りになった。例えば，共通語で話しかけられると，津軽弁にコンプレックスがあるためか「私知りません」と挙動不審になる方もいた。私たちはこのような結果から，観光産業に対する住民の意識改革から始める必要があると考えた。

対策

何故観光に対する住民の意識が低いのか考えると，やはり観光産業に対する認識不足からきていると思われる。観光産業がビックビジネスになりうる産業だということを住民に理解してもらいたい。

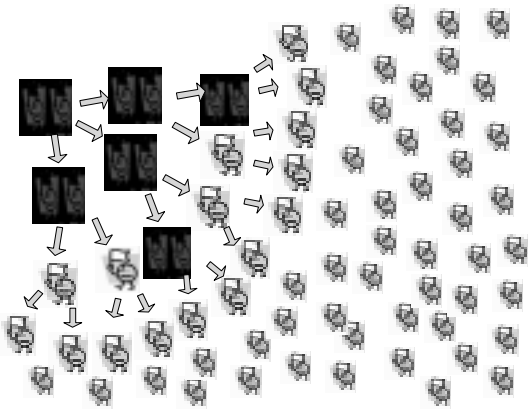
私たちの提案する対策には，観光ビジネススクール「はやて」に参加された皆さんの協力が必要となる。この講座に参加し，観光産業の魅力，個人のホスピタリティスキルの向上，また，組織のホスピタリティについて学習してきた。そして，キーワードが住民の協力であることを知ることができた。この講座で学習してきたことを，「あなたの周りの人に伝えて欲しい」というのが，私たちの考えである。

伝え方として，あなたが講師になり大々的講演会を開き伝えるのではなく，友達や家族また職場の人といった身近な人に伝えて欲しいのである。

例えば，観光について友達や家族また職場の人に「観光講座で〇〇面白かった」，「人をもてなすことってすばらしいよ」，「観光産業はビッグビジネスになるかも」と気軽に身近な人に伝える。そのときのポイントは「気軽に」。気軽だと伝えなくてはならないという

プレッシャーもないので長続きするのである。

私たちが核となり右の図のように伝え，身近な人から話を聞いた人は，違和感なく素直に観光産業のすばらしさ，住民の協力の必要性を感じ，その人がまた友達や家族また職場の人に伝え，そこで聞いた人がまた次へ，また次へ･･･とねずみ講のように伝えることにより，津軽地域全体の観光に対する意識を変えられるのではないかと考えたのである。



行政の力だけでは住民の意識改革は難しいと思う。住民の観光客・観光地に対する意識を変えられるのは私たち住民である。

伝えよう，広めよう，私たちから

観光産業におけるホスピタリティの向上
～地域ぐるみのホスピタリティ～

グループＢ

私達のグループでは、「観光産業におけるホスピタリティの向上」をテーマに調査を行いました。「観光産業」と一言といっても範囲が広いため、今回は「交通」「宿泊」「飲食」、この３つの視点からの現状把握、疑問点や課題の抽出、解決策の提案を目指しました。

１．交通（地域調査：弘前）

県の調査によると、現在弘前市に訪れる方々の利用する交通機関で最も多いのは、自家用車ということでした。このことから、近隣に住む方の来訪が多いのでは、という印象を受けました。しかし、これから先、新幹線の開通に伴い、遠方からの観光客が増加することが予想されます。そこで重要になるのは公共交通機関ではないでしょうか。その中でも、今回はバスを取り上げたいと思います。

まず実際に利用してみて感じたのは、車両の老朽化でした。ステップの段差が激しくお年寄りや体の不自由な方には乗り降りが大変だったり、中には新紙幣の両替ができないと表示されていたりする車両もありました。しかし、これら設備を改善するには多額の費用が必要となり、特に弘前市のバスは民間企業が運営しているため、費用の負担は難しいと思われます。では、その不便を何でカバーするのか、それはやはりサービスではないでしょうか。

例えば、1万円札や5千円札など大きなお金しか持ち合わせていないお客様のために、千円札と小銭の釣り銭をいくらか用意しておいたり、お客様が乗車される際は「ご乗車ありがとうございます」、降車される際には「ありがとうございました」と挨拶をしたりするだけで、より良い印象をお客様に与えることができると思います。また挨拶することにより、どのようなお客様が乗車されるかが把握でき、お年寄りや体の不自由なお客様が乗車される際に、「お手伝いしましょうか？」と自然にお声がけができるのではないでしょうか。

次にバスの中でも100円バスについて考えてみたいと思います。観光館と駅前の観光案内所での聞き取りによると、観光客にお勧めしたり、観光客が利用している公共交通機関は100円バスが多いようです。しかし、これは本来住民用として作られた生活路線なので、本来の目的と実際の利用実態の違いが問題を引き起こしているのではないでしょうか。住民とっては簡単な乗り換えや路線も、観光客や外国の方にはとっては難しく感じることもあると思います。

その解決策の1つとして、それぞれの路線を、○○線は赤、××線は①など、色や数字で区別することを提案したいと思います。それに伴い、バスのフロントガラス上に掲示されている行き先標示板も色や数字で区別すれば、より分かりやすくなるのでしょう。現在、青森県では年配の方の観光客が多く、なおかつこれから先、団塊の世代も退職し、その数はますます増加していくものと思います。このように路線を区別すれば、年配の方々にとっても乗換えなどが

分かりやすくなり、自由に移動できるようになるのではないでしょうか。

最後に、「フリー乗車券」「津軽フリーパス」などのチケットのＰＲ強化の必要性について考えてみたいと思います。これら2つのチケットは、津軽一帯を自由に好きなようにまわることを可能にし、とても良い取り組みだと思います。ただ、ＰＲが十分ではないような気がします。インターネットでも調べてみましたが、すぐには見つかりませんでした。もともとこれらのチケットの存在を知っていた私達が調べてもなかなか見つからなかったのですから、存在を知らない観光客にはうまく伝わっていないのではないでしょうか。インターネットに加え、観光客が来られた際には、ＪＲやバスの窓口でも積極的にお勧めしたり、ポスターの掲示をしたりすれば認知度はさらに高まると思います。

また、ＰＲを強化することで、観光客だけでなく住民にもチケットの存在が知れ渡ると思います。住民が知っていれば、道端や駅で観光客に会った際、「こういうチケットもありますよ」と教えてあげられるようにもなると思います。さらに、チケットの利用が増えれば関連する施設の利用も増え、地域の活性化につながる可能性が高くなるのではないでしょうか。

２．宿泊（調査地域：青森市）

宿泊と言えば、観光産業の代表とも言うべき重要な産業だと思います。そこで、実際に宿泊業に従事している方々が、どのような意識を持っているのか、ということを調査するため、いくつか質問をしてみました。回答が偏らないために、今回は駅前の市街地エリアと温泉街エリアの両方で調査を行いました。

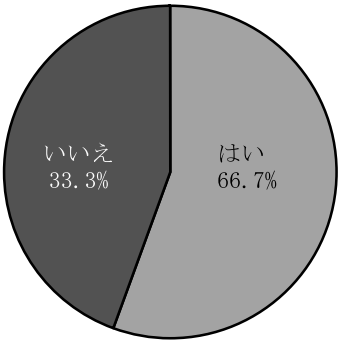
まず、最初に「ホスピタリティ向上のために特に取り組んでいることはありますか？」という質問をしてみました。市街地エリアでは「はい」が66.7%で「いいえ」が33.3%、温泉街エリアでは「はい」が44.4%で「いいえ」が55.6%という結果でした。この質問は、大半が「はい」だろうと予測していたため、結果を見て驚きました。「ホスピタリティ」という言葉の意味がわからなかったのか、適当に回答したのか理由は定かではありませんが、ホスピタリティに関する意識や関心の低さを感じました。

そして、もう一つ注目すべきなのは、最後の質問です。「ホテルの売りは何ですか？」と尋ねたところ、両エリアとも「施設・設備」という回答が最も多かったのです。具体例をあげると、市街地エリアは「駅から近い」など交通の便が良いことをアピールするのが１番多く、温泉街エリアでは「温泉」や「景観」という回答が多数でした。果たして施設や設備を「売り」としていて良いのでしょうか。

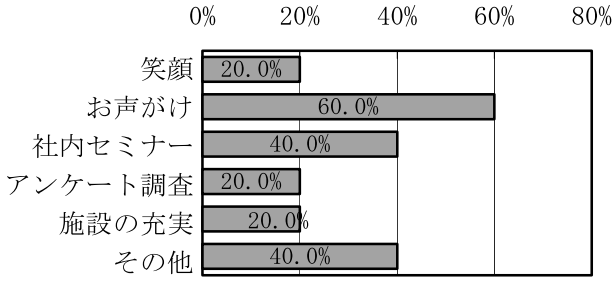
「駅から近い」というのはある意味、市街地に立地しているので当たり前のことのように思います。同じように市街地にある他のホテルとどこで差をつけるのでしょうか。また、温泉があり、海に面した宿というのも全国にたくさんあるのではないでしょうか。首都圏からの観光客にとって、青森という土地は決して気軽に行けるほど身近な土地ではありません。それでも「青森」に行きたいと思わせるためには、独自のオリジナリティが必要であると思います。そのようなオリジナリティを施設や設備でお客様に提供するのは難しいことです。やはり宿泊においても重要なのは、お客様の立場に立った接客やサービスなのではないでしょうか。

旅館・ホテル業におけるホスピタリティに関するアンケート（市街地エリア）

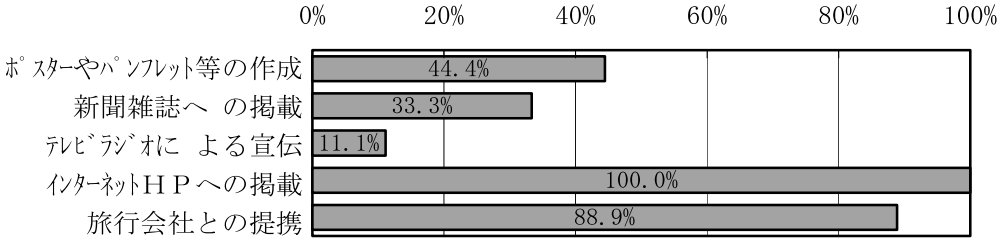
Ｑ１．ホスピタリティ向上のために特に取り組んでいることはありますか？



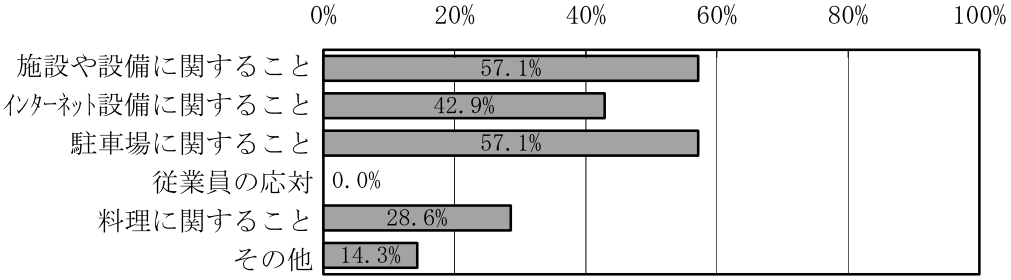
＜具体的な取り組み＞



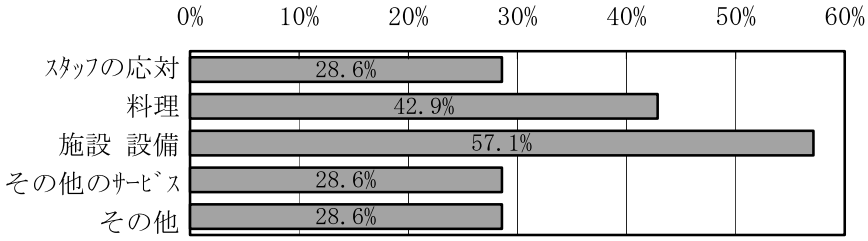
Ｑ２．ホテルのＰＲのためにどのような取り組みをされていますか？



Ｑ３．お客様からの要望やクレームにはどのようなものがありますか？

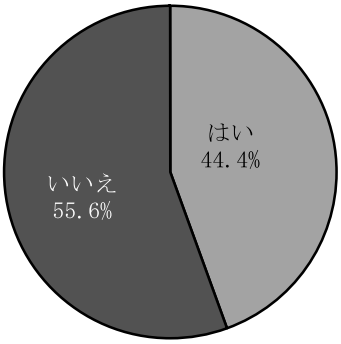


Ｑ４．ホテルの「売り」は何ですか？

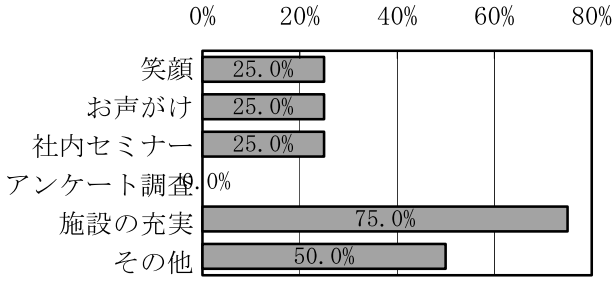


旅館・ホテル業におけるホスピタリティに関するアンケート（温泉街エリア）

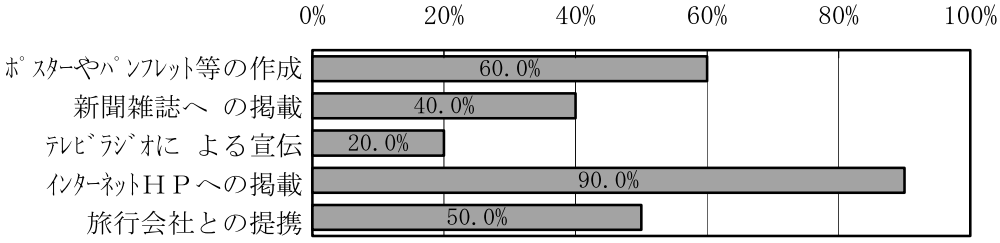
Ｑ１．ホスピタリティ向上のために特に取り組んでいることはありますか？



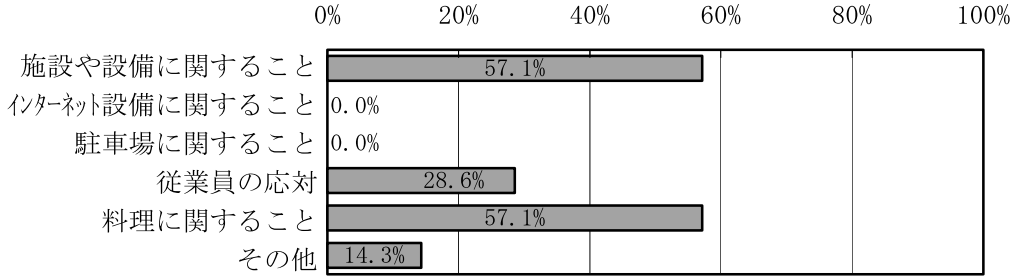
＜具体的な取り組み＞



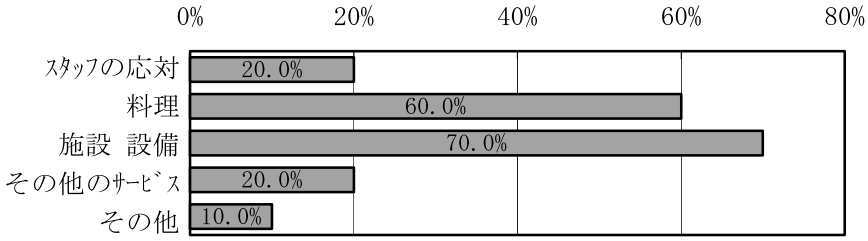
Ｑ２．ホテルのＰＲのためにどのような取り組みをされていますか？



Ｑ３．お客様からの要望やクレームにはどのようなものがありますか？



Ｑ４．ホテルの「売り」は何ですか？



しかし、市街地エリアにおいては、全国チェーンのホテルなどもあり、接客のマニュアルを変えるというのは困難であると思います。そこで私たちは考えました。自分達のホテルに足りない部分は他に補ってもらえば良いのです。そもそも観光客の大半は、「宿泊」を目的に青森に来るのではなく「青森」という土地を体感するために来るのです。それならば、自分達のところだけに囲い込まず、地域全体が連携し、お客様に100%の満足を与えられれば良いのではないでしょうか。そこでこの「連携」を業者間と地域ぐるみの二つの視点から考えてみました。

(1) 業者間の連携

交通の便の良い市街地エリアと、自然に囲まれた温泉街エリアがお互いの長所を生かし、観光客の方々に「青森県」を存分に満喫していただきましょう。例えば、旅行会社が企画したプランではなく、宿泊施設同士が直接話し合い、お客様のための心のこもった「おもてなしプラン」を開発するのです。

〈２泊３日の旅行の場合〉

例その１．１泊目は移動で疲れるため駅から近い市街地のホテル　→　２泊目は観光の後、ゆったりと温泉に入れる宿

例その２．１泊目は青森の自然を満喫できる宿　→　２泊目は、次の日の帰りの電車の時刻が早い、又はゆっくり土産物を見たいなどの理由から駅から近い市街地のホテル

例その３．１泊目は海に面した宿　→　２泊目は山に囲まれた宿

など、お客様にとって旅のしやすい、また、旅が楽しくなるようなプランを提供するのです。さらに、このように宿泊施設同士が直接連絡を取り合うことにより、１段階上のサービスを提供することも可能になるのではないでしょうか？例えば、１泊目の市街地エリアのホテルをチェックアウトする際、「本日は○○旅館にお泊まりのご予定ですね。こちらは、○○旅館周辺の観光マップでございます。どうぞご利用ください」と、お客様が欲しいと思われるような情報を、尋ねられる前にこちら側から提供することができるのです。また、体調の優れないお客様がいる場合には、次の日宿泊する予定の宿に予め連絡を入れ、注意を払ってもらうこともできます。「△△ホテルから連絡がありました。お体の具合はいかがですか？」と声をかけられるだけで、お客様の心には感動が生まれるのではないでしょうか。青森という「田舎」ならではの温かいおもてなしは、リピーターの増加に繋がると思います。

(2) 地域ぐるみの連携

ここでは浅虫地区を取り上げますが、まずこの地区を歩いてみて感じたことがあります。つまらない、面白みがない、つまり積極的に行ってみたいとは思えない町だということです。なぜでしょうか。

そこで、人々特に観光客が来たい町とはどのような町なのかを考えてみたいと思います。やはり観光客にとって魅力ある町とは、安心で歩く楽しさがあり、さらに食とお土産のある町でしょう。これは観光客だけでなく、地元の人達にとっても魅力的な要素を含んでいると思います。つまり「住みたい町＝訪ねたい町」と言えるのではないでしょうか。

その第一条件は「そぞろ歩き」のできる町だと思います。

そぞろ歩きの町のため浅虫地区では何か取り組みをしているのか、浅虫温泉駅の案内所で聞き取りを行いました。聞き取りの結果、他宿泊施設利用者へ津軽三味線演奏の開放、浅虫湯札、早朝散歩、足湯が挙げられました。浅虫湯札は、1200円で湯札を購入すると、参加施設のうち３箇所の入浴ができるというもので、観光客、住民が対象です。早朝散歩は地元ボランティアガイドが案内するもので、こちらも観光客、地元住民が対象です。４月１日から10月31日まで雨天を除く毎日行われ、朝七時半から一時間程度のコースをいくつか用意しているものです。

これらの取り組みを聞き、いくつか問題があり、これだけでは町の賑わいにはつながらないのでは、と感じました。例えば、浅虫湯札では、潤うのは旅館やホテルだけで、浅虫地区でその他の商売をなさっている方々にはメリットはありません。そぞろ歩きができ賑わいのある町にするためには、地域を巻き込まなければなりません。旅館、ホテル以外の方々にも何らかのメリットをもたらす取り組みが必要になってくると思います。

その取り組みの１つのアイディアとして、「浅虫屋台の日」というのはどうでしょうか。宿泊施設の方々だけでなく他の商売をしている方々も、自分達の店の前に食べ物や商品など、自分達の売り物を屋台に出してもらい、夜店のような催し物をするというものです。このように地域全体が参加する取り組みを繰り返していけば、人も自然と集まってくるのではないでしょうか。

３．飲食

飲食については、現在の弘前観光協会と商工会議所が取り組んでいる「洋館とフランス料理の街ひろさき」キャンペーンを取り上げて考えていきます。

このキャンペーンは、お城・桜のイメージが非常に強い弘前を、弘前のもう一つの顔である、明治・大正時代のレトロな洋館やフランス料理にスポットを当て「洋館とフランス料理の街」をアピールしていこう、ということを目的に行われています。

はじめに、このキャンペーンの問題点について考えてみました。

一つ目は、「観光客は“ フランス ”という外国を体験するためにわざわざ弘前を訪れるだろうかということです。観光客ではなく、少しリッチな気分を味わいたいと思う地元住民のキャンペーンになっているのではないでしょうか。

二つ目は、観光地を訪れたときに「すごくあの街はよかった」というイメージを植えつけるには、やはり日本人であればその地方に伝わる郷土料理など地域固有のものが食べられることが必要なのではないだろうか」ということです。人の抱くイメージはなかなか変えることができません。せっかく弘前には、お城や桜というイメージがあるのだからそれを上手く活用すべきであると思います。

そこで、弘前への提案として、「洋館とフランス料理の街ひろさき」を参考に「津軽料理と歴史の街ひろさき」キャンペーンを考えました。

このキャンペーンでは、四季を彩る津軽の象徴、歴史を刻む、「弘前公園」や弘前城を囲み、守るように建てられている「神社仏閣」、文明開化の息吹が感じられる明治・大正の「洋館」。そして、日本海を北上し、季節を知らせる魚や、このあたりで取れる天然の魚介

類を使用した、「津軽料理」をより広くたくさんの人に知ってもらおう、ということを目的としています。
具体的な案としては…

1．弘前公園の中や神社仏閣、洋館にスタンプ設置。集めたスタンプ数に応じて、弘前の物産をプレゼント。
2．いくつかの郷土料理店が「郷土料理定食」を共同制作。それぞれのお店で出す。
3．弘前にある郷土料理店でお持ち帰り用や地方発送用を販売。
4．郷土料理店に弘前観光パンフレットを。弘前公園や、建物には郷土料理店の案内パンフレットや地図を置く。（同じものを置かない）

ということです。

「洋館とフランス料理」で弘前をアピールするのでは、一部の地域・住民しか観光の促進に参加することができません。地域全体で、観光促進に携わることが必要であると思います。

飲食におけるホスピタリティの向上には、これまで述べてきたような「昔から弘前に広い範囲で伝わるモノ」を利用し、地域全体で関わっていくべきなのではないでしょうか。

まとめ

私たちはこれまで、「観光産業におけるホスピタリティの向上」について「交通」、「宿泊」、「飲食」に分け、考えてきました。そして、私たちが最後に行き着いた答えとしては、「自分だけが儲かればいい」ということではなく、「地域全体が明るくなるような協力が必要である」ということです。

観光客の大半は、その地域全体を通して観光をしたいと思っているはずです。やはり、地域全体の連携が業者間でも民間でも大切になってくると思います。

平成17年度観光ビジネススクール「はやて」報告

立佞武多における経済効果とまちづくりについて

グループ　〇**葛西　貢造・佐藤　憲之**
前田　歌子・秋元　慶子

1．はじめに

私たちのグループでは、最終報告に向けて津軽のねぶた・桜祭り・こぎん刺し・津軽塗などについて話し合いました。津軽の夏祭りを代表するものとして青森ねぶた・弘前ねぷた及び五所川原立佞武多があります。ねぶたは、県内外ばかりではなく最近は海外でも運行されて国際的に評価が高くなりつつあります。しかし今年の観光客、愛知万博の影響か、また運行スタイルが毎年同じためかそれとも他に原因があるのか、全体的に観光客の伸び悩みが目立っている。今日の報告では、観光の在り方や観光を核としたまちづくりについて五所川原の立佞武多を例に報告することにする。

2．観光の意義

観光とは無縁な生産工場や埋もれた産業遺跡などを観光の対象として、まちおこしなどに生かす取り組みである。身近な製品の製作工程に触れることで、名所旧跡中心の観光より知的好奇心を刺激するだけでなく、ものづくりへの関心を高めるなどの効用もある。このように、観光は教養を身につける文化的意義と地域社会の活性化、即ち経済的効果を生む地場産業の振興の側面がある。

政府は2003年１月、日本の観光立国の在り方を検討するため「観光立国懇談会」（首相の私的諮問機関）を設けました。その基本理念は「住んでよし、訪れてよしの国づくり」の観光を核とした国家デザインの再構築を提案している。政府の方針は2010年に訪日外国人の人数を1,000万を目標とし、「ビジット・ジャパン・キャンペーン」（ＶＪＣ）の始動をはじめました。これを受けて国土交通省は、2003年を「訪日ツーリズム元年」と位置づけ、海外での日本の魅力を宣伝している。世界観光機関（ＷＴＯ）は2010年の世界観光客は約10億人、2020年は15億6,000万人を予測している。

観光は「21世紀の成長産業であり、観光人に必要なのはおもてなしの心（ホスピタリティ）である」（大阪明浄大学学長　塩澤潔）。そのためには豊かな人格を養うことが求められる。例えば京都では「京都・観光文化検定試験」が実施されている。これは京都に関する歴史、文化、産業、暮らしなど他分野にわたり京都通度を認定する検定試験で３級・２級・１級に分かれる。

また、「観光は世界の相互理解に貢献し、都市や地域の未来を開くフロンティアである。観光に携わる人が、国内外の人の心を如何に捉え感動や満足を与えることができるか。観光には無限の可能性がある。未来は予測するものでなく、創造するものである」（大阪コンベンション協会会長　津田和明）。

観光に対するこのような考え方は日本ばかりでなく、例えばオーストラリアでは観光は経済発展を牽引する主要産業の一つとして位置づけて、国を上げて積極的に誘致政策に取り組んでいる。フランスでは日本の文化に興味を持つ若い世代が増え、日本の様々な姿が毎日紹介されているという。このように観光産業は、国内外的にまだまだ伸びる成長産業であるといえる。観光に携わる人びとの力量が問われていると言っても過言ではない。

3．ねぶたと三内丸山遺跡観光の現状と課題

最近、五所川原の立佞武多（写真１）が全国的に有名になりました。ここ数年青森ねぶた・弘前ねぷたの観光客数は減少しているが、五所川原立佞武多と八戸三社大祭は逆に増加している。（表１）

表１　青森県の主要な夏祭りの入り込み数

（単位：万人、％）

	16年		15年		開催期間
		前年比		前年比	
青　森　県	751	▲1.6	763	12.0	
青森ねぶた	335	▲7.7	363	2.3	8／2～7
弘前ねぷた	161	▲6.9	173	16.9	8／1～7
五所川原立佞武多	162	7.4	138	12.7	8／3～8
八戸三社大祭	93	4.0	89	58.7	7／31～8／4

（出所　青森観光コンベンション協会、弘前観光協会、八戸観光協会、五所川原商工会議所）

五所川原立佞武多や八戸三社大祭の増加は、観光客向けの祭り関連情報サイトの開設やＰＲ活動の展開などによるものと思われる。また、土産物店ではオリジナルグッズの売れ行きが好調であった。

国特別史跡の三内丸山遺跡は、公開４年目の1997年度をピーク56万人を越えた入場者数が、その後減少に転じて2002年度は約27万人に減少した。同年11月に「縄文時遊館」の完成、同年12月の新幹線八戸駅開業の成果で2003年度は47万８千人に回復した。しかし、今年４月は前年度より６千人の減少、弘前桜祭りも前年よりも９千人の減少となっている。

今年の減少については、愛知万博の影響が大きい（目標の1,500万人を大幅に上回る2,000万人の達成）と思われるが、その他の原因としては新幹線開業ブームが薄れてきたのと三内丸山遺跡の見学については「何回来ても変わっていない」という意見が出ている。青森ねぶたについても観光客が、朝お土産を買うため街に出かけても店のシャッターが閉まっていたり、祭り期間中の宿泊料金の異常な高さ（2004年度青森県の平均料金11,614円　対前年比477円増）など指摘されている。

しかし、青森ねぶたや弘前ねぷたは歴史ある文化として、今後も観光客を熱くする意味でも更に海外での出陣で外国の観光客を増やす意味でも、地元の人びと・観光業者と

行政側が一体となった更なる取り組みの充実が求められる。

あと５年後に迫った新幹線新青森駅開業に向けて、第２次交通のインフラ整備、アスパム・八甲田丸の港エリアの活性化をどうするのか、現青森駅周辺と新青森駅との観光都市としてのバランスをどうするのか課題が山積している。

４．五所川原立佞武多復活の背景とまちづくり

現在「立佞武多」と呼ばれる巨大ネプタが、五所川原の記録に登場するのは明治40年頃であった（写真２）。「立佞武多」という名称は、平成８年に復元に携わった市の有志達によって命名された。題材は三国志、歌舞伎など中国や日本の歴史上の武者である。五所川原ネプタは、大正時代末頃までは高さ約20ｍもあり、隣町の金木町からも見えたという。昭和29年頃より各町内の合同運行が始まり、30年代後半には企業のネプタも参加した。その後、五所川原市内に電柱が目立つようになり、資金難や後継者問題もあって立ネプタの運行は自然消滅したが、平成５年に明治、大正のものと思われる高さ9.9ｍもある台座の設計図７枚が見つかった（写真３）。台座約10ｍ、人形約10ｍ、幅約８ｍの巨大ネプタである。

平成８年、「立佞武多復元の会」が結成され、80年ぶりに復元した（写真４）。本格的に製作したのは４月から開始。市民や企業からの寄付が500万円集まった。建築技術を持つ労働力の提供や部品の現物、支援などがあって約１世紀隔てた平成８年、１回限りの復活となった。そして、平成10年に市が立佞武多の支援を決め運行が決定された。７階建てビルの高さに匹敵する高さ22ｍ、総重量16トンの立佞武多「親子の旅立ち」が若者30人によって駅前を出発した。その年12月、東京ドームで「活彩あおもり大祭展」の開催に、初めて出陣し見物客の目を釘付けにした。（立佞武多小冊子６～７頁）

このように、80年ぶりに復活した立佞武多は多くの有志、支援者及び電線の埋没工事を積極的に行った行政側が一体となって立ち上げた成果である。2003年度の運行には138万人の観光客があって、経済効果は約33億円に上がった。この立佞武多は、近い将来200万人の観光客が予想される。そのため、市当局は運行コースの拡幅（写真５）、運行距離の延長、アーケードの撤去など着々と対策を立てている。

先日、五所川原市中心活性化協議会では、市の歴史・文化を生かしながらが立佞武多の館」と連動したまちづくりの提案を行っている。「立佞武多の館」と結んだ路線に集客施設を設置すれば、農産物や加工品を販売し地域の産業振興や西北五地区の経済効果も多いに期待がもてる。また、1997年に開店したエルムの街ＳＣは、開店以来年間約500万人が利用し、2004年２月27日同ＳＣに「津軽ラーメン街道」が開店し、開店１ヵ月で約22万９千人のお客が集まった。

昔から五所川原市は、西北五地区の中心地都市として栄えて来たし、21世紀を迎えた今日「立佞武多の館」を中心に、大町の再開発を行って新五所川原市の街並みづくりに期待したい。しかし、まちづくりの主役はあくまでも地域住民であり、住民の声を吸い上げる雰囲気作りが大切である。

5．終わりに

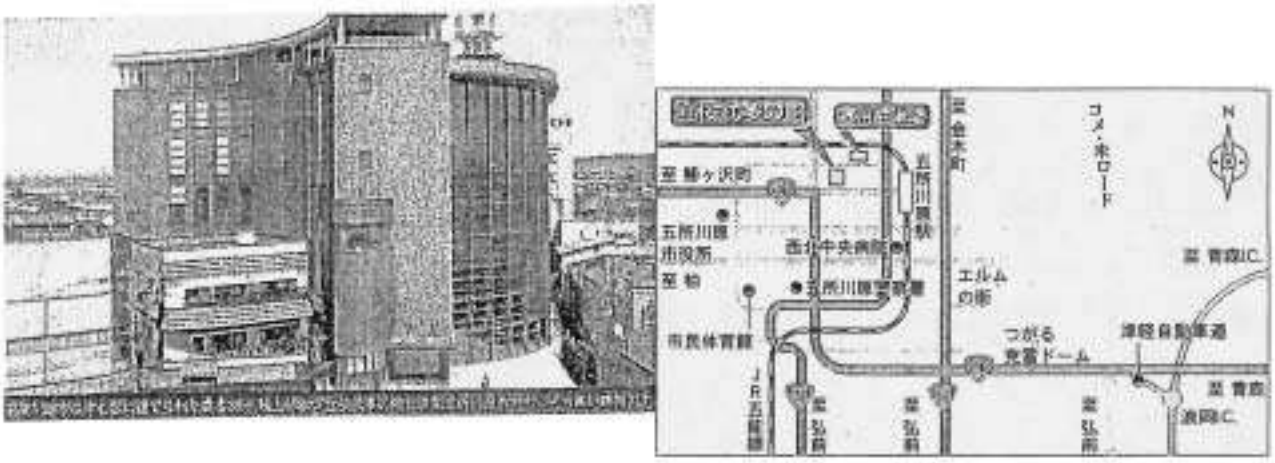
青森県は、四季折々の自然と四方海に囲まれた自然豊かな位置にある。山の幸、海の幸が豊富で、しかも他県を圧倒する観光資源がいっぱいある。十和田湖、八甲田山、岩木山、弘前市の桜、りんご、むつ湾のほたてなど「訪れて良し、食べて良し、住んで良し」の宝庫であると誰でも語れる。しかし、観光客に「青森県の観光は日本一だ！」と自信を持っていえる人は何人いるだろうか。その理由として一つ目は、私たちが７月から学んだ「観光ホスピタリテイ」がまだ十分に備わっていないのではないか。二つ目は「絶対観光で生計を立てていくんだ」という意気込みが不足しているのではないか。三つ目は、地域ぐるみのまとまりが薄いこと、観光を点で捉える（地域という狭い考え）のではなく線として捉えていく、つまり市町村の枠を越えた取り組みが重要である。私たち一人ひとりが講座で学んだことを実践しながら、共鳴者を増やす努力も大切である。そして、何よりも観光に携わる関係者が、「観光客一人ひとりを大切にする熱意と知恵と努力の継続が最大の武器である」ことを忘れてはならない。

最後に、阿部進氏（教育評論家）は「岩木山を見て、立佞武多を誇れることはとても素晴らしい」と感想を述べていました。地元に胸を張って誇れるものがあることがまちづくりの第一歩である。

【参考資料】

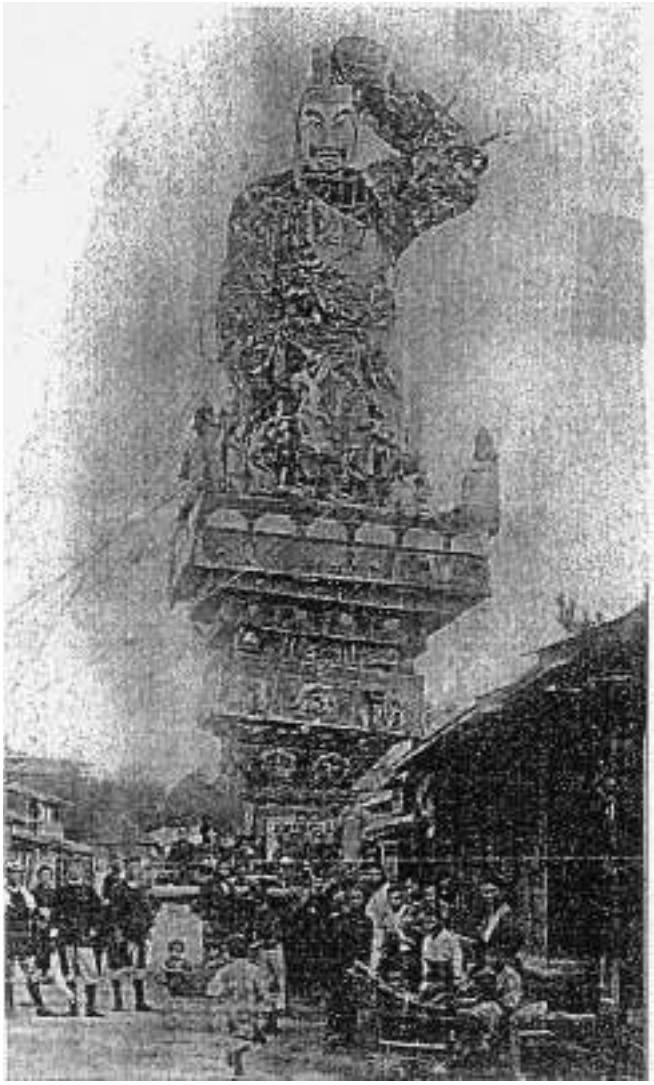
「立佞武多」小冊子
「立佞武多の館」観光パンフレット
日本銀行青森支店観光報告書
東奥日報新聞・朝日新聞・観光経済新聞

写真１　五所川原立佞武多の館と地図



（出所　立佞武多小冊子）

写真２　明治40年頃の巨大ネプタ



明治時代後期の巨大ネプタ（題材／仁徳天皇）

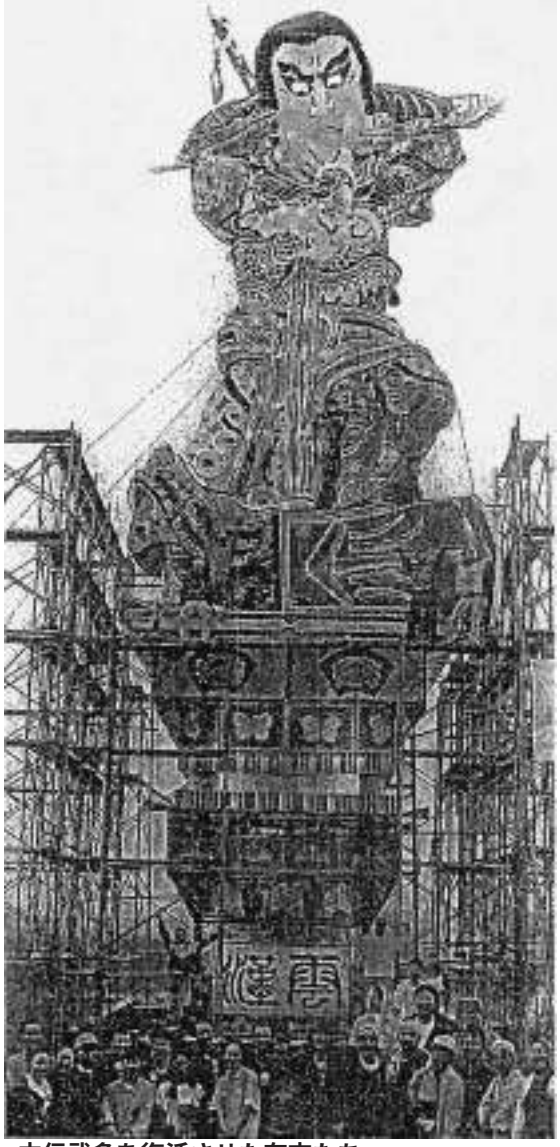
明治時代後期の巨大ネプタ

（出所　立佞武多小冊子）

写真３　台座設計図

寸法が記入された台座設計図

写真４　80年ぶりに復活した立佞武多

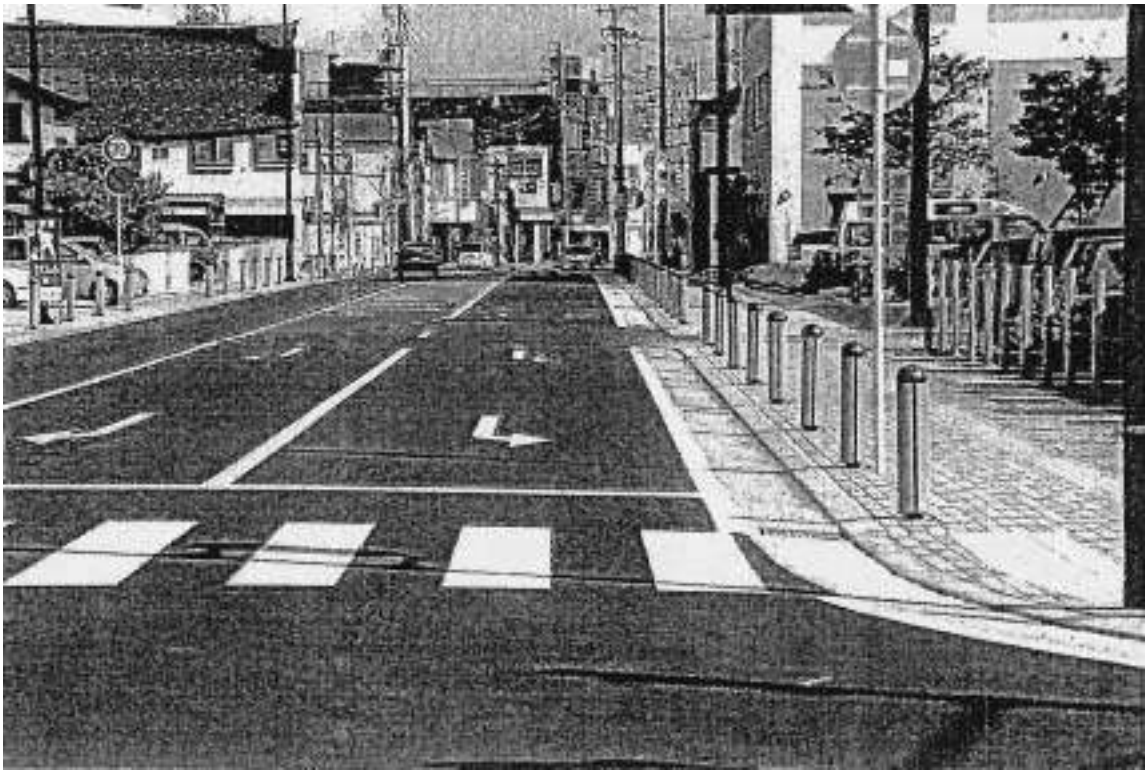


立佞武多を復活させた有志たち

約１世紀ぶりの威容を見ようと
河川敷に集まる市民

（出所　立佞武多小冊子）

写真５　新運行コースと立佞武多の館周辺



（出所　筆者撮影）

「地域観光活性化のためのネットワーク作り」

（発表者）

ではこれから「4 seasons」のグループ発表をしたいと思います。

まずグループ名の紹介をしたいと思います。そちら側から斎藤さん、菊池さん、小笠原さん麗香ちゃん（割石さん）と、副リーダーの小山さんで、私がリーダーの吉崎です。よろしくお願いします。テーマは「地域観光活性化のためのネットワークづくり」です。このテーマにしたのは、これまで皆さんの発表でも出てきたように、これから観光産業発展のためにネットワーク、住民同士のつながりが不可欠だと考えたからです。

弘前市の現在のネットワークがどれくらいのレベルにあるかを比較するために、津軽地域の観光地を歩いて検証することにしました。津軽地域の観光地である黒石市と金木町へ津軽フリーパスを買って観光しました。皆さんの先程の発表で色々と出てきたのでご存じとは思いますが、津軽フリーパスがどのようなものであるかという概要を少し説明したいと思います。まず価格ですが、大人1500円、子ども750円です。適応するエリアというのが弘前・黒石・五所川原・大鰐・碇ヶ関・岩木の地域の、快速を含む普通列車と、バスは指定区間があるんですけど、その中では乗り放題になっています。これは買うときに「何日から使いますか」と聞かれますが、使い始める日を含めて2日間有効になります。岩木の方は、白神エリア込みは大人3000円、子ども1500円になります。この津軽フリーパスでは様々な割引やサービスがあって、協賛店などでいろいろな特典を得ることが出来ます。

調査旅行の内容は、津軽地域のネットワークについてです。この津軽フリーパスを使って調べた点は、フリーパスが今現在うまく機能しているかどうかということと、津軽フリーパスの浸透性、交通機関の充実性、津軽地域の人間の観光客への対応がどのようなものであるか、についてです。津軽フリーパスがうまく機能しているかどうかというのは、協賛店を訪れたときに、店の方がパスを見てどのような対応をしてくれるかということなど、交通機関でうまく対応してくれるかということです。交通機関の充実性は、電車やバスの接続など、色々の便についてです。津軽地域の人間の観光客への対応はどのようなものであるかというのは、先ほどの発表でもありましたように、津軽人は観光客を見たら逃げるという定説がインターネットでも色々出ていたので、それについても調べてみました。

津軽フリーパスを使った調査結果です。

まず良い点は、「津軽人の観光客への対応」です。これは、先ほどの観光客を見ると逃げるという定説に関してですが、私たちが観光した黒石市では、こみせ通りを歩いていると、年配の女性の方に「どこからきたの？」と声をかけられたり、道を聞いたわけでもないのに色々と「この店はこういう歴史があるんだよ」って案内して頂いたり、人との繋がりがあってすごく温かみを感じました。それと、「観光地であることの意識」です。黒石はこみせ通りが「日本の通り100選」に選ばれたことで、地元の人はそれを認識していまして、そのことから来るものだと思います。次に「津軽フリーパスの価格」です。1500円で乗り放題というのは大変お得でした。弘前から五所川原まで行くのに往復で1000円かかり、さらに金木まで行ったんですけども、五所川原から金木に行くのにまた1000円かかり、ここ

だけでもう500円の得をしました。さらに黒石にも行ったので、ちょっと価格のほうは不明ですが、またさらにかかるので、２日間乗り放題で1500円は大変お得でした。

次に、悪かった点を挙げたいと思います。津軽フリーパスは切符を買ってから、こちらのガイドブックやその中に入っている時刻表が渡されます。時刻表はこちらなんですけれども、私たちが初日に観光しに行ったときに、最初びゅうプラザに買いに行ったんですけれども、まずびゅうプラザが10：30に開くということになっていまして、そこからフリーパスを買って、それからガイドブックなどが渡されるわけです。で、青森に来て津軽フリーパスを使おうと思った観光客の方にしてみたら、そこで渡されても、２日分の観光のプランをたてるのはすごく大変なのではないかと思いました。色々交通の便も調べるのも大変でしたし、それで半日くらいをつぶしてしまって、ちょっと損な気分にもなってしまいました。ですから、そんな遠方の方々を考えると、これらのガイドブックや時刻表はフリーパスを買ったときに渡されるのではなく、フリーパスをＰＲしているところで、もう既にあった方が良いのではと思いました。次に、「付属の地図がわかりづらい」ということです。私たちがフリーパスを買ったときは、このガイドブックはついてこなかったんですね。買ったときについてきたのは、こちらの時刻表とガイドマップだったんですけれども、このガイドマップがおおざっぱでわかりづらかったです。色も遠くから見てわかるように単調なので。あとバスの時刻表のことですけども、鉄道もバスも全部同じ色で書かれているので、どこまで鉄道でどこからがバスの時間なのか、そういった点がわかりづらくて、実際に使う分に苦労しました。そして次が、「協賛店がわかりづらい」と言うことです。先ほど挙げた、「地図がわかりづらい」と繋がるんですけれども、このガイドブックに載ってある場所の説明というのが、住所で書かれているんですよ。なんとか町なん丁目と書いてあって、「そんなの観光客にわかるわけ無いじゃん！」ということで、お店を探すのがすごく苦労しました。それと、フリーパスの協賛店でたまにお店の外にこのステッカーが貼ってあるところもありましたが、そういうのも一般的ではなく、お店の中に入ったら「あ、ここが協賛店なんだ」と、やっとわかったお店もありました。ですので、もう少し外からぱっと見てここが協賛店なんだなと思えるような工夫があればいいなと思いました。

次に、詳しく黒石エリアの良かった点と悪かった点について発表したいと思います。

まず良かった点は、「こみせ通りこみせマップ」です。こちらの地図ですけども、黒石駅があり、こみせ通りがあり、他の広い地域に渡ってお店とかも詳しく載っていて、それと別に何町とか言うのも載ってるので、ガイドブックと照らし合わせてもわかりやすかったですし、お店の特徴的なもの、例えば「美味しいなんとか屋さん」といった、そういう説明も載っていたので観光客の側からしたらとても使いやすい地図だったと思います。つぎに、「観光客への対応に慣れている」という点です。先ほども言いましたが、黒石のこみせ通りを歩いていたら年配の女性の方に色々案内して頂いたり、こみせ通りを少し入ったところに公園やトイレがある小さい脇道みたいな感じのところにいた小学生くらいの女の子にも声をかけられて、楽しいふれあいをして参りました。最後に、無料休憩所「まごや」というところです。ここは無料の自転車貸し出しも行っているんですけれども、ちょっとこみせ通りからは離れているんですが、ちょうど駅からこみせ通りの方に行く途中にありました。その建物は新しいんですけれども、こみせ通りを意識して黒い木造の建物になって

いて、ゴミ箱や自動販売機にも黒い木で覆いをしていて、全然黒石やこみせ通りのイメージを害さない場所でした。

駅がここで、こみせ通りがここってさっき言いましたけれども、駅をまっすぐ行ってガソリンスタンドがあるので、すぐ行くとこの辺にあったんですよ。駅から割と近くて、こういったパンフレットとか休憩所もあるし、自転車も貸し出しているので、大変居心地のいい場所だったように思います。

次に、悪い点を挙げたいと思います。悪かった点は、駅前にパンフレットや看板が無く、地域の情報に乏しいということです。駅を出て、フリーパスについてきたガイドマップを参考にして歩いたんですけれど、これは駅がどの方向を向いてどういう設定でこの地図が書かれたのかというのが全くわからなくて、せっかくこみせ通りで有名なのに、そのこみせ通りの行き方という地図くらいあっても良かったんじゃないかなと思いました。次に虹の湖行きのバスです。ちょうど今紅葉の季節で、「じゃあ虹の湖行ってみようか！」となったんですけども、虹の湖へのバスの便が４つしかないんですね。朝６時、８時、９時、夕方４時という時間しかなくて、その虹の湖付近で働いている人のための通勤のバスでしかないんじゃないかなと思いました。

次は金木エリアについて説明したいと思います。まずこの写真についてですが、ちょっとお見苦しい写真なんですけれども、この写真は駅前にある休憩所と地図です。こうして休憩もできて、この看板なんですけれども、上の方の地図は車でどう行けばいいかという地図になっていて、ちゃんと道路の何号線かごとに色別されています。下の方が、その観光地の有名な写真が貼ってあって大変良かったです。

まず先に悪かった点を挙げたいと思います。悪かった点は、多言語標識が少ないと言うことです。駅にローマ字表記してあったくらいだったと思います。

次に良かった点を挙げたいと思います。駅からまず斜陽館に向かったんですけれども、斜陽館へ向かうまでの道で、だいたい曲がり角のところにはきちんと標識がありました。そこの商店街のお店と協力してあったのもありまして、そのお店の看板の上に、こっちが斜陽館、こっちが金木駅というような標識があったので、全く迷わずに斜陽館にたどり着くことができました。つぎに、金木駅と金木交流プラザが複合施設になっているということです。こちらのパンフレットがその写真ですが、駅の隣に休憩するところもあり、また情報もたくさんあったので、そこでパンフレットを手に入れて、で、この裏に地図も書いてあって、大変観光客向けだなと思いました。次に、買う気？にさせる物産館「マディニー」です。こちらがそのパンフレットというか、チラシなんですが、だいたい観光客の方は、その土地でしか食べられないものや手に入れられないものは絶対お土産に買って帰ろうというのが観光客の心理だと思います。実際に私たちが観光客となって、物産館に行ったときには、ここでしか手に入らないものばかり手にとっていました。この観光館には太宰治のグッズであったり、あと有名なのが、ここで食べられる太宰ラーメンです。お土産のものには試食もあって、試食があると購買機会も増えると考えます。土産は絶対買っていきたいものだと思いますし、食べる機会があったらますます買いたくなると思います。試食はたくさんあったんですけれども、店員の方に声をかけられたりすることがなかったので、変な圧力がなかったのでゆっくり色々と選べました。この小山さんは変なマ

ジックにかかって、すごいお土産を抱え込んでました。（結局買わなかったけど）

これまで話した調査結果をもとにした私たちの分析をお話ししたいと思います。

黒石市では、行政が発信する情報においては乏しい印象でありましたが、地域住民と接する機会が多く、そのなかで補うことができました。先ほども申し上げましたように、駅にはあまりパンフレットなどもなく、先ほどの地図を見ても、どういう状態で、駅の向かいに何があるのかという、駅の建ち方、方向がよくわからなかったんです。しょうがなく、こみせ通りまで自力で歩いていったんですけども、こみせ通りの地域の住民との接触において色んな情報を得ることができてそのなかで補うことができて、そういう意味で大変良かったと思います。

金木町では観光カリスマの存在が大きいと思いました。金木町には角田周さんという観光カリスマがおりまして、その方は地吹雪体験ツアーの発案者でもあるんですが、その方は三味線会館の理事長もされているんですけれども、その方の存在が金木の観光に関して、大きいのではないのかと思います。住民との接触はあまり無かったんですが、逆に接触することが無くても目的地まで到達できたというのは、その地図・情報とかがすばらしかったからなのではと思います。先ほどの標識にしても地図にしてもそうだったと思います。

観光客の視点から考えたソフト面。ソフト面と言うのは、次の頁で詳しくお話しします。観光のハード面とソフト面。私たちが考えたハード面ソフト面というのは、ハード面というのはまず集客施設や宿泊施設等、昔からあるものであったり、観光目的地であったり、基盤整備や誘導、キャンペーンや旅客輸送なども含まれると考えます。衛生施設は清潔な方がいいというのは、観光客だけではなく、みなさんそうだと思います。やはり衛生施設というのはみなさん必ず使うものですから、清潔な方がいいと思いますし、バリアフリーなども進められていた方が良いのではないだろうかと思います。それと「施設だけで観光」というのではなく、その地域住民とのふれあいも大事な観光資源であるということを実感しました。先ほどお話しした黒石市のように、こみせ通りという町並みも十分楽しめたんですが、その地域の人間とのふれあいは大変楽しかったものでした。ハード面が優れていなくても、ソフト面が優れていればそれだけでリピーターに繋がるっていうのが私たちの考えなんですけど。例えば旅館に泊まったとします。旅館がそれほど良いものでなかったとしても、旅館の主人の人柄とか、住民の人柄がとても良かったら、またそこに行きたいなというようにリピーターに繋がるのではないかと考えました。

先ほどのソフト面・ハード面の中から、より重要なのはソフト面なのではないかと考えました。地域住民が観光地意識を持つようにすれば、段階的に住民同士のネットワークが形成され、協力し合い、よりよい観光地を目指すことになることで、観光地のよりよい地域作りを、さらなる活性化につなげることができると考えました。私たちが考えた結論なんですけれども、弘前における観光でのソフト面で必要なことは、やはり住民の意識向上なのでなはいかと思いました。ソフト面は、地域住民の観光客をもてなそうとする気持ちから来るものであると思います。ソフト面が充実していると観光客は感動し、また来たいと思います。するとリピーターが増えます。そうすると、地域の活性化に繋がると言うことになります！！！！

最後になりますが、住民の観光自意識向上のために、私たちは次のことを提案してみようと思います。①弘前旅プランを市民に応募させる。②弘前に住んでいる人たちに弘前のいいところをどんどん挙げてもらって、いいとこづくしの弘前を、観光客に見せてあげたいと思いました。③ＮＰＯサークルの設立。これは市民主体の観光サークルのようなものです。観光案内所とかが早く開いて早く閉まってしまうようなので、これは市民が主体となってやったほうが、よりよいものになるのではないかと考えました。④弘前の観光客の目から見た町中散策ツアー、私たち弘前に住んでいる人たち自身が観光客の立場になってもっと考えてみようということです。⑤ＣＭ放映。よく、テレビなので大間のマグロとか流れていましたけど、ＣＭとかを作って、できれば全国で流して、もっともっとアピールしていければいいのではないかなと思いました。最後ですが、⑥弘前のわかりやすい地図を地域住民で作成。これは先ほど、黒石市の方で頂いた地図のようなものがあればいいと考えたとこからなんですけど、弘前は城下町なのでとても複雑だと思います。先ほどの地図みたいなものが、観光客にとっても、大学結構あるので、大学生とか、観光客じゃないにしても、いろいろ訪れる人には絶対必要不可欠のものでは無いかなと考えました。私も学生で弘前に来たときは全然町がわからず毎日ダイエーなどに行っていたので、もっとお城までの、色々土手町にいい店があるのに何で紹介しないんだろ？というそういう思いからきたものです。

では、ちょっと熱くなりましたが以上で終わらせたいと思います。ありがとうございました。

（司会）

はい、ありがとうございました。具体的に実際旅をされて、その成果を弘前に提案ということでしたけれど、皆さんの方でご感想とかなにかございますでしょうか。

（会場からの発言）

すごく具体的でわかりやすかったと思います。何が一番良かったかというと、具体的な対策、ただ単にこうすりゃいいやああすりゃいいやというだけでなく、誰がやるのかと言う、市民がやるとかＮＰＯがやるとか、そういうところがはっきり書かれていて、あんまり抽象的でないところがすごくいいと思いました。一つ質問があるのは、ソフト面の観光資源というのは、質と量とどっちが不足しているのか、それとも不足はなくてただ単にＰＲが足りないのか、そういったところでどう感じたか聞いてみたいと思うんですが。

（発表者）

ソフト面ですよね。おもてなしの方は、実際に観光してみて今まで言われているように、津軽の人は冷たいとかそういうことではなかったので、思いこみによって観光客の方が遠ざかっているのではと思ったところもあるので、やはりＰＲ不足であったり情報発信が不足しているのではないかな、と思いました。

（会場からの発言）
例えば最近中国とか韓国からの観光客来てますけれども、そういう面での対応というのはどうなんですか。

（発表者）
中国や韓国の方向けの他言語のってことでしょうか。

（会場からの発言）
言語もそうだし、ソフト面で観光をガイドする人がいるとか。

（発表者）
そういうのはちょっと乏しかったように思います。

（会場からの発言）
ありがとうございます。

（司会）
それでは時間もかなり押してしまいましたので、第４グループの発表これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。
各グループとも熱の入った非常におもしろい発表だったと思います。せっかくなので何かまとめたい気にもなるんですけど、ひとまず全グループの発表をこれで終わりということにしたいと思います。

6月24日　東奥日報

観光ビジネスの先導役になって

弘大でスクール開講

県と弘前大学が二十三日、同大で観光ビジネススクールを開講した。観光による地域の活性化を狙い、企業・個人にキャリアアップを図ってもらう。

講座には地元のホテル関係者や観光業者ら三十三人が参加した。開講にあたり遠藤正彦学長が「講座終了後、ぜひ観光ビジネスの先導役になってほしい」とあいさつ。人文学部の森樹男助教授が「座学だけでなく、成果発表で提言をまとめてほしい」と講座の概要を説明した後、県観光推進課総括主幹の秋田佳紀さんが、観光の定義や歴史などを紹介した。

受講者の一人、青森市のNPO団体理事長の前田歌子さんは「津軽塗や三味線、裂き織りなど地域の伝統文化に、新しいものを加えて全国に発信したい」と話していた。

ビジネススクールは十月まで開かれ、県内外から旅行業や百貨店など各分野の第一線で活躍する講師を招いて、もてなしの力を養うほか、弘前市内見学ツアーやホテルでの接客実習なども行う。

弘大と県が共催した観光ビジネススクールの受講者

10月1日　東奥日報

観光カリスマ蓑谷氏 まちづくりで講演

弘大

県や弘大生涯学習教育研究センターなど主催の観光ビジネススクールがこのほど同大で開かれ、飛騨高山観光協会長で高山商工会議所会頭、国の「観光カリスマ」に選ばれている蓑谷穆（みのたに・たかし）氏が講演。約八十人が聴講した。

蓑谷氏は「飛騨高山の観光とまちづくり」と題して講演。「観光とは、その国や地域の光、輝きを示し、または仰ぎ見るという意味。青森県にも光はたくさんある。新幹線青森駅開業までに、これまで以上のPRが必要だ」などと述べた。

また「観光は行政ではなく、民間主導でなくてはだめ。地域の住民一人一人が観光の重要性を認識しながら、PR役とならなければ」と指摘。地域活性化やまちづくり、人口動態など、さまざまな切り口から論じた。

講演する蓑谷氏

住民の意識改革必要

観光ビジネススクール　弘前で成果発表

観光ホスピタリティー能力の向上などをテーマに意見を交わした成果発表会

県と弘前大学主催の観光ビジネススクール「はやて」の成果発表会が二十七日、弘前市内で開かれた。受講生がこれまでの講義を基に意見を交わし「もてなしの心を高めるために住民の意識改革が必要」「地域ぐるみの取り組みや観光への意気込みを高めるべき」といった提言が行われた。

同講座は観光関連産業を支える人材育成を目的に県と県内三大学の主催で開かれている。弘前では養成講座が、六月から行われ、成果発表会が講座の締めくくりとなる。

発表会では受講生約二十人が四つのグループに分かれて「観光にやさしい街づくり」「観光産業におけるホスピタリティー能力の向上」などをテーマに意見を発表した。

受講生はアンケート調査などを基に本県の観光地としての実力や観光ホスピタリティーの浸透度などを分析。「住民の観光に対する意識はまだ低い。行政に頼らず住民から住民へつなげる意識改革を行っていきたい」「業者や地域が意見を出し合うような企画がもっと必要」といった意見が出された。

観光ビジネススクールはやて
受講者アンケート

ご氏名をご記入の上，下記の質問にお答えください。

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．　今回のはやてを受講した全体の満足度はどれくらいですか？　一つだけ選び，○をお付けください。

ａ．大変満足　　ｂ．やや満足　　ｃ．普通　　ｄ．やや不満　　ｅ．大変不満

２．上記の回答の理由をご記入ください。

３．講義についてお尋ねします。どの講義が役に立ちましたか。以下のアルファベットのうち，あてはまるものに○を付けてください。
（a：大変役立った，b：少し役立った，c：どちらともいえない，d：ほとんど役立たなかった，ｅ：全然役立たなかった）

1	「青森県の観光について」 （青森県観光推進課　秋田氏）	a　b　c　d　e
2	「サービス接遇の基本」 （弘前観光コンベンション協会　飯塚氏）	a　b　c　d　e
3	「ホスピタリティ産業における接客」 （ＪＡＬ客室乗務員　柴田氏）	a　b　c　d　e
4	「電話応対マナー」（ＮＴＴ人材育成専属講師　秋元氏）	a　b　c　d　e
5	「牛角躍進の裏側～マニュアル以上の接客術～」 （レインズインターナショナル　牛角研修担当　松井氏）	a　b　c　d　e

6	「ワークショップ」	a　b　c　d　e
7	「地域における観光開発～ウエスパ・つるつるワカメなど～」 （ふかうら開発　石澤氏）	a　b　c　d　e
8	「消費者ニーズに対応した産地戦略」 （伊勢丹ＭＤ統括部支店催事部　髙橋氏）	a　b　c　d　e
9	「宿泊施設におけるホスピタリティ」 （アソベの森いわき荘　齊藤氏）	a　b　c　d　e
10	「ふるさとの宝をみつけよう」 （東日本旅客鉄道株式会社秋田支社　石塚氏）	a　b　c　d　e
11	「飛騨高山の観光とまちづくり」 （観光カリスマ　蓑谷氏）	a　b　c　d　e
12	成果発表会	a　b　c　d　e

４．設問３の回答について，回答の理由などご自由にご意見をご記入ください。

５．「弘前市内観光ツアー」についてお伺いします。

（１）あなたは「ツアー」に参加しましたか。

ａ．参加した
ｂ．参加しなかった

（２）「参加した」と回答した方にお伺いします。参加しての感想はいかがでしたか。

ａ．とても有意義だった
ｂ．それなりに良かった
ｃ．あまり良くなかった
ｄ．どちらともいえない

（３）「参加しなかった」と回答した方にお伺いします。参加しなかった理由は何ですか。

ａ．参加したかったが，用事があったので参加しなかった
ｂ．休日（土曜日）だから参加し難かった
ｃ．あまり魅力を感じなかったから参加しなかった
ｄ．その他

６．レポートについてお伺いします。この講座では，毎回レポートの作成をお願いしましたが，このレポートについてどのように思われましたか？（複数回答可）

a. 大変励みになった
b. 面倒だったが，勉強になった。
c. 時間がなくてほとんど作成できなかった。
d. ただ面倒で，ほとんど提出しなかった。
e. このようなレポートは無意味である。
f. その他（具体的にご記入ください　　）

７．修了後の予定や進路についてお伺いします。皆さんは修了後，どのような予定や進路をお考えですか。次の中からあてはまるものをお選びください。

a. 観光産業に就職（転職）したい
（もしあれば，希望する企業名・職種　　）
b. 講座の内容を活かし，観光産業以外に就職（転職）したい
（もしあれば，希望する企業名・職種　　）
c. 社内におけるキャリアアップ
d. 社内における事業展開
e. 新たな起業
f. とくに考えていない
g. その他（具体的にご記入ください　　）

８．本講座では，修了後のアフターケアを実施する予定です。以下のアフターケアのうち，あなたが希望するものは何ですか？　希望するものに〇を付けてください。（複数回答可）

ａ．推薦状の発行
ｂ．講座の成果を企業などにPR
ｃ．カウンセリング
ｄ．各種支援制度の紹介
ｅ．その他（具体的にご記入ください　　）

９．この講座の開講は，何を見て知りましたか。

ａ．ポスター，チラシ
ｂ．　ホームページ
ｃ．新聞の記事
ｄ．大学の掲示・大学からのダイレクトメール
ｅ．職場からの推薦
ｆ．知人から
ｇ．その他（具体的にご記入ください　　）

10．講座の開講曜日についてお尋ねします。この講座は「木曜日」に開講されましたが，この開講曜日についてどうお考えですか。あてはまるものに〇を付けてください。

ａ．木曜日でよかった。
ｂ．土曜日や日曜日の開講がよかった。
ｃ．他の曜日がよかった（具体的にご記入ください　　）

11．講座の開始時間についてお尋ねします。この講座は午後 6 時 30 分からの開講でしたが，この開講時間についてどうお考えですか。あてはまるものに○を付けてください。

ａ．ちょうどよい
ｂ．6 時開始がよい
ｃ．7 時開始がよい
ｄ．その他（具体的にご記入ください　　）

12．講義形式についてお尋ねします。

（1）講義の時間は 1 時間でしたが，この時間についてどうお考えですか。あてはまるものに○を付けてください。

ａ．ちょうどよい
ｂ．長すぎる
ｃ．短すぎる
ｄ．その他（具体的にご記入ください　　）

（2）後半はグループでの討議を行いましたが，グループ討議は有益だったと思いますか。あてはまるものに○を付けてください。

ａ．とても良かった
ｂ．それなりに良かった
ｃ．有益だと思わない
ｄ．どちらとも言えない

（3）今回，最終日にグループで成果発表することをお願いしましたが，こうしたグループでの取り組みについてどう思いましたか。あてはまるものに○を付けてください。

ａ．とても良かった
ｂ．それなりに良かった
ｃ．有益だと思わない
ｄ．どちらとも言えない

13．受講料についてお伺いします。この講座の受講料は一般 1 万円，学生 5000 円，法人 1 万 5000 円でした。この受講料についてどうお考えですか。あてはまるものに〇を付けてください。

ａ．ちょうどよい
ｂ．高い
ｃ．安い

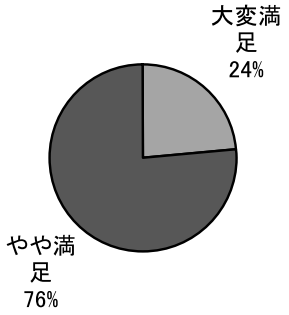
14．来年もこのような講座に参加するとすれば，どのような内容であれば参加してみたいと思いますか？　今年の講座の内容をふまえて，ご提案ください。（話を聞いてみたい講師，実習の内容など，自由にお書きください）

15．「観光ビジネススクールはやて　ホスピタリティ能力養成講座」についてご意見などありましたら，ご自由にご記入ください。

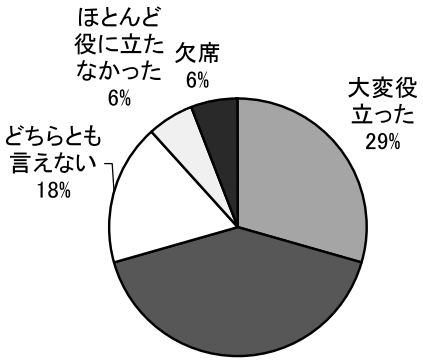
以上，ありがとうございました。

2005　観光ビジネススクール
「はやて」受講者アンケート
有効回答数17人(男5人、女12人)

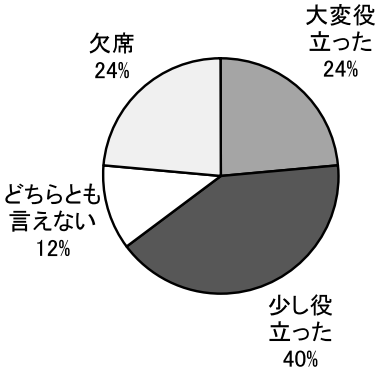
Q1　全体の満足度



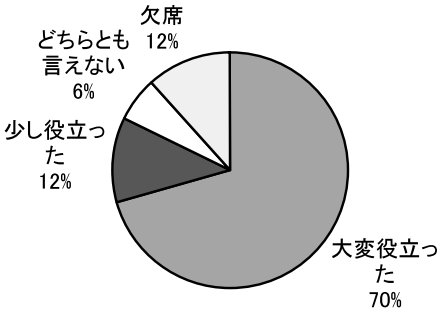
Q3-1　青森県の観光について



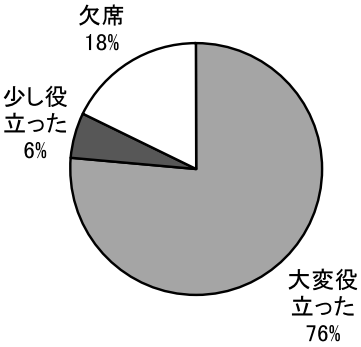
Q3-2　サービス接遇の基本



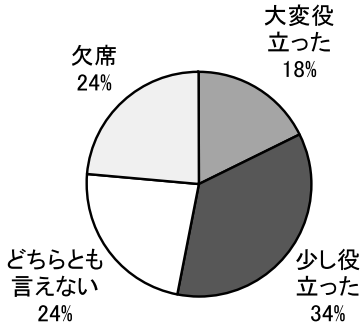
Q3-3　ホスピタリティ産業における接客



Q3-4　電話応対マナー

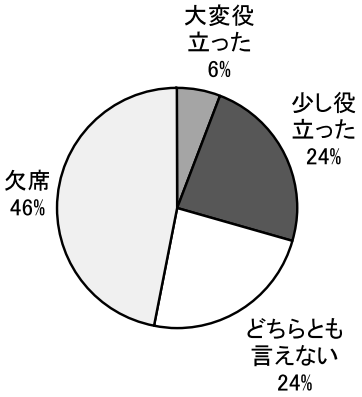


Q3-5　牛角躍進の裏側

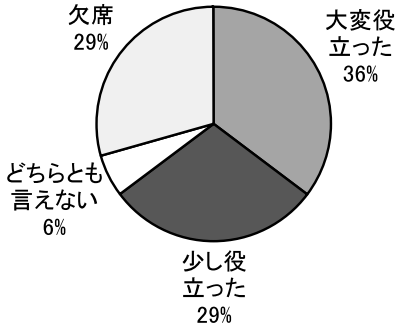


2005　観光ビジネススクール
「はやて」受講者アンケート

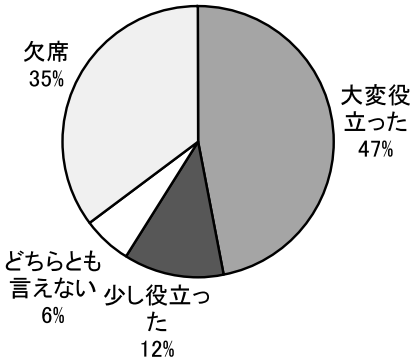
Q3-6 ワークショップ



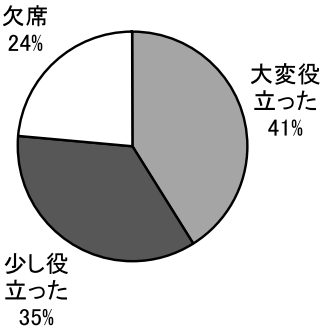
Q3-7 地域における観光開発



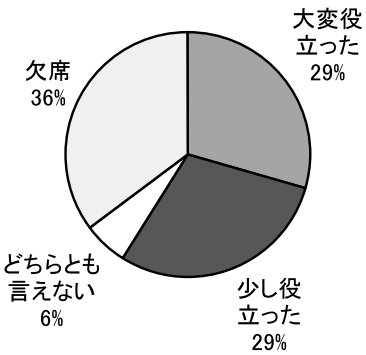
Q3-8 消費者ニーズに対応した産地戦略



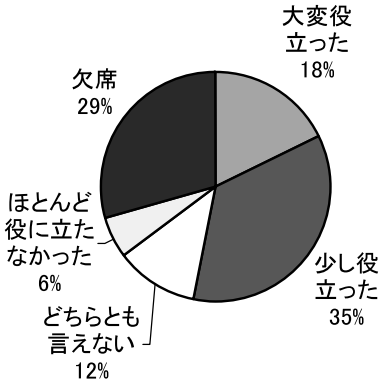
Q3-9 宿泊施設におけるホスピタリティ



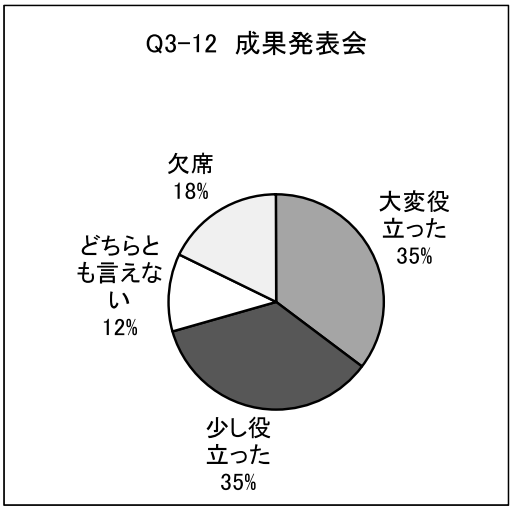
Q3-10 ふるさとの宝をみつけよう

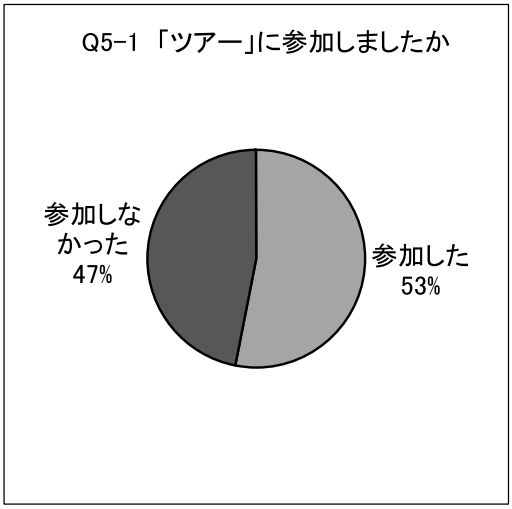


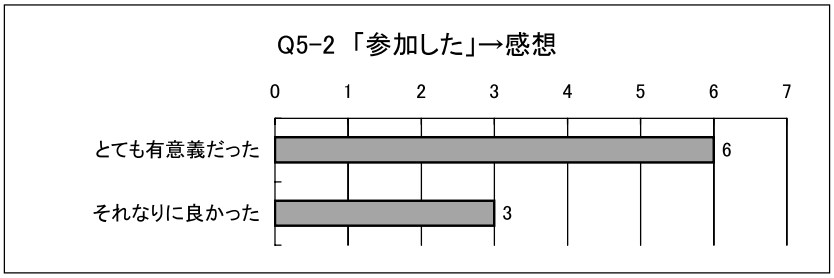
Q3-11 飛騨高山の観光とまちづくり

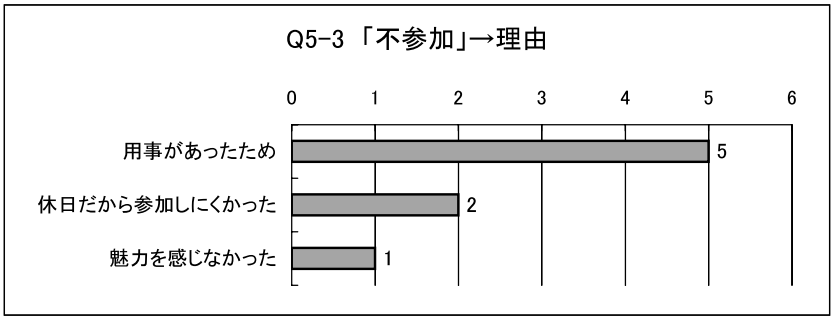


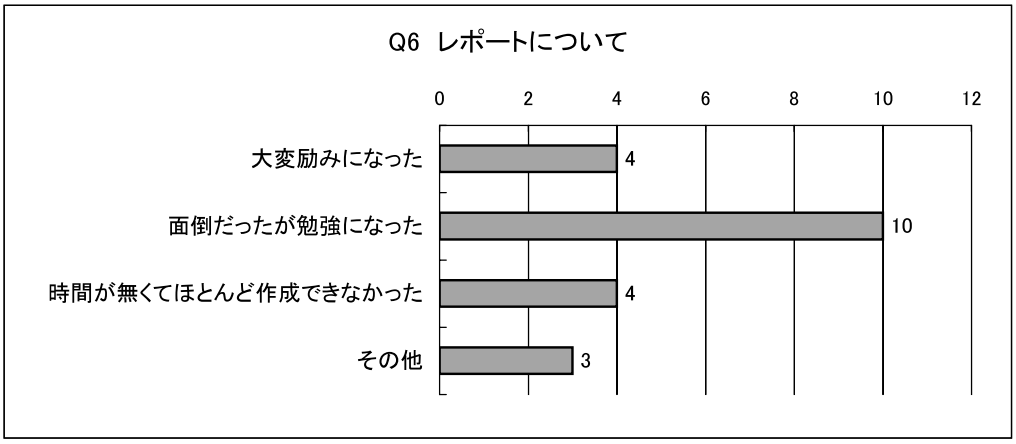
2005 観光ビジネススクール
「はやて」受講者アンケート



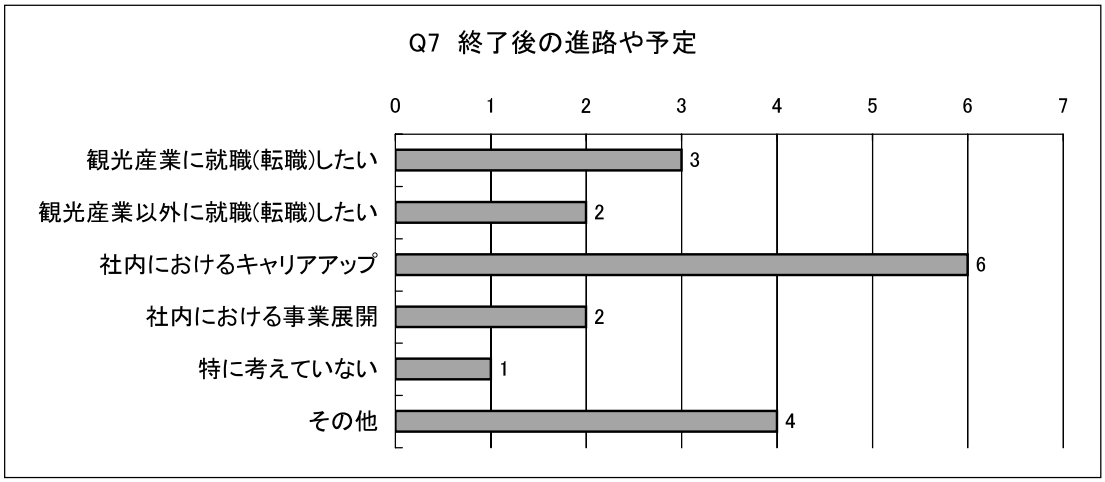


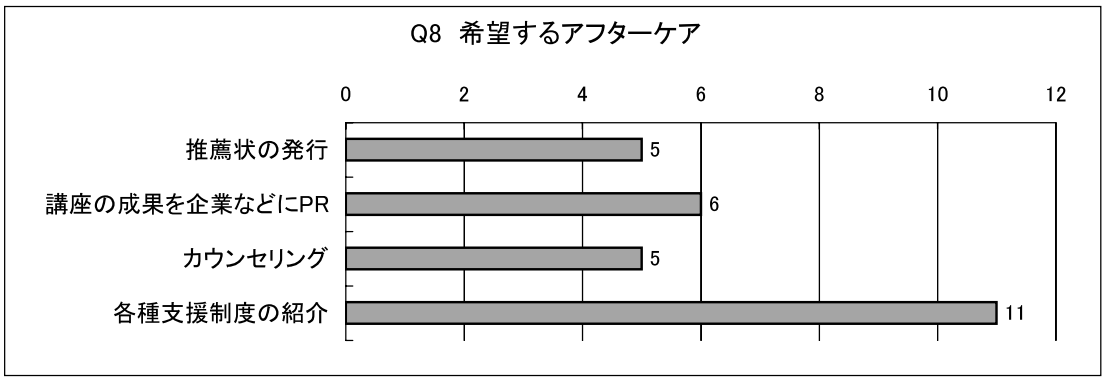


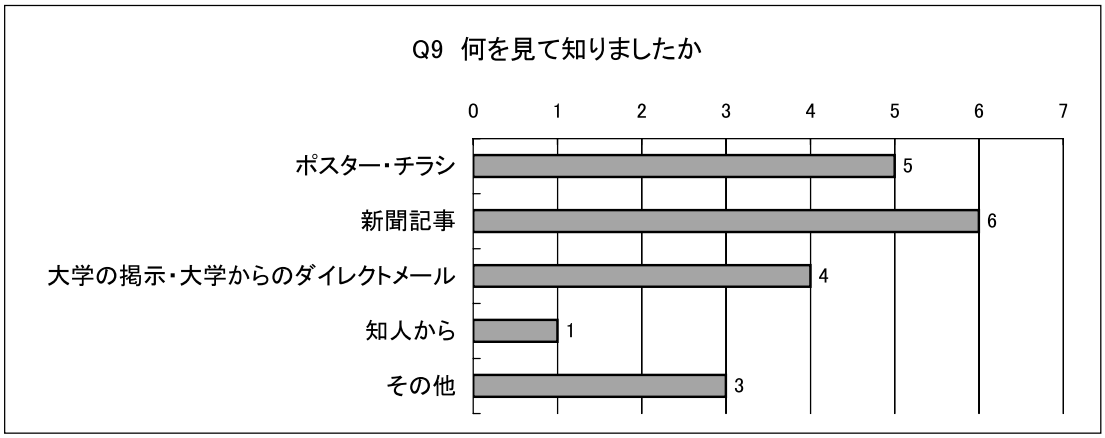


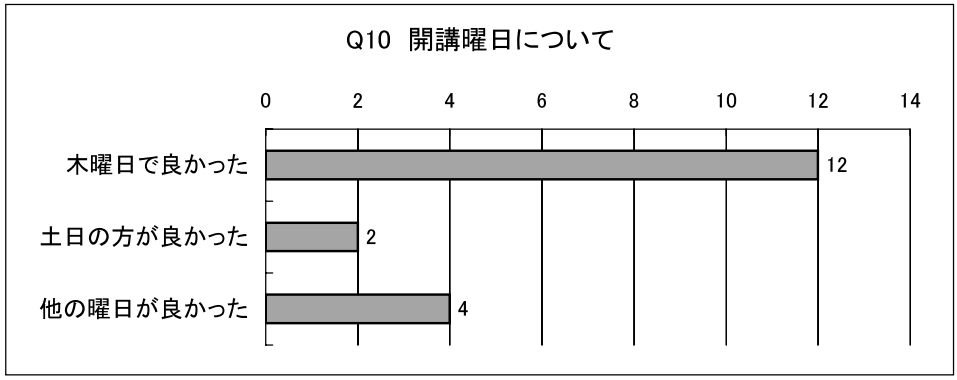


2005 観光ビジネススクール
「はやて」 受講者アンケート



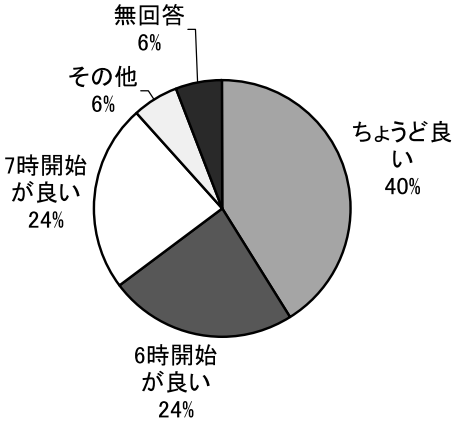




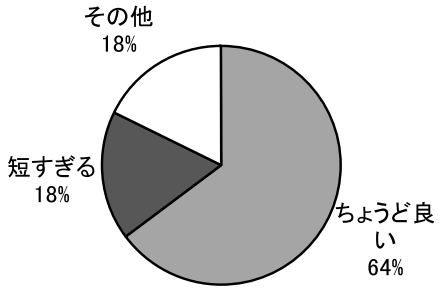


2005 観光ビジネススクール
「はやて」 受講者アンケート

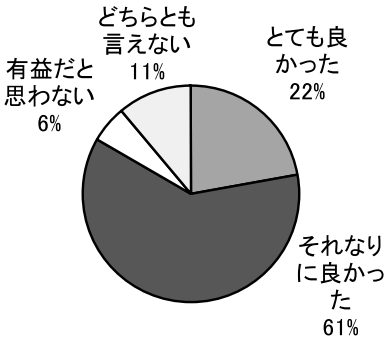
Q11 講座の開始時刻について



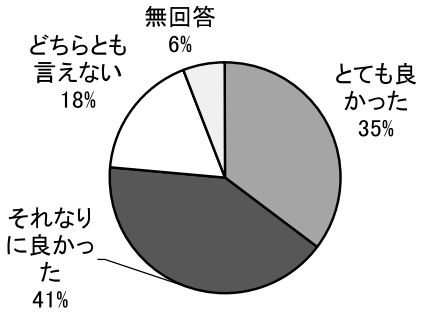
Q12-1 講義時間について



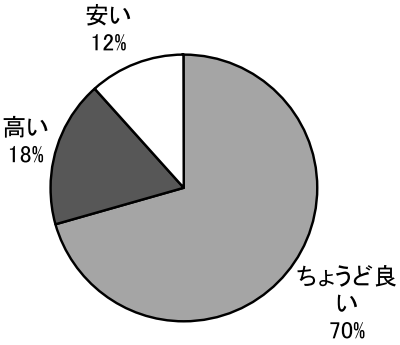
Q12-2 グループ討議について



Q12-3 成果発表について



Q13 受講料について



2005 観光ビジネススクール
「はやて」 受講者アンケート

Ⅱ. 事　業　報　告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

(1) 公開講座

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
災害についての危機意識をお持ちですか 8月25日（木） スマトラ沖地震に学ぶこと 9月1日（木） 阪神淡路大地震から10年 ～災害とボランティア活動～ 9月8日（木） 起こりやすい山地災害とその対応 ～途上国と日本を比較して～ 9月15日（木） 青森県における地震・火山災害とその予測 9月22日（木） 災害に備える 時　間 18：00～20：00	国立国際医療センター 緊急外来医長 **朝　日　茂　樹** 人文学部　助教授 **山　下　祐　介** 農学生命科学部　教授 **檜　垣　大　助** 理工学部　助教授 **小　菅　正　裕** 理工学部　助教授 **津　村　浩　三**	スマトラ沖地震や阪神淡路大地震の経験などにも学びながら，私たちが住んでいる青森県で起きる可能性のある災害について考えてみる。		青森市中央市民センター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 5,000円	弘前大学・青森市教育委員会	13名 修了者 11名
弘前大学公開講座 9月13日（火） 消費者の豆知識 ～不当表示などへの対応を考える～ 10月18日（火） 防災教室 ～災害から身を守る～ 11月15日（火） 循環型社会を目指して ～ゴミのリサイクルから堆肥づくり，休耕田のトンボ池づくりまで～ 時　間 14：00～16：00	人文学部　教授 **保　田　宗　良** 理工学部　助教授 **津　村　浩　三** 理工学部　教授 **鶴　見　　實**	現在の生活の中で，私たちは深刻化する環境問題や予想される災害・消費者問題などへの対応が求められています。それらの問題を考えながら，生活に役立つ様々な知識・情報を分かりやすく紹介した。		八戸市福祉公民館
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 3,000円	弘前大学・八戸市教育委員会	17名 修了者 13名
健康な暮らしについて考える 9月21日（水） 青森県民の寿命 －なぜ短命なのか－ 9月28日（水） 生活習慣病とその対策(1) －肥満と糖尿病－	医学部　教授 **中　路　重　之** 医学部附属病院　講師 **小　川　吉　司**	わが国は医療の進歩や生活環境の改善などにより，世界有数の長寿国となっています。しかし，我が青森県は，あらゆる健康指数が国内できわめて低い位置にあります。どうしたら短命県を返上できるのか，どうしたら私たちはもっと健康に過ごせるのか，一緒に考えてみる。		三沢市公会堂

10月5日（水） 生活習慣病とその対策(2) －食生活と運動－ 10月12日（水） よい眠り －心からくる睡眠障害，病気としての睡眠障害－ 10月19日（水） 豊かな老後 －豊かな老後を過ごすために必要なこと－ 時　間 18：30～20：30	医学部　講師 **梅　田　　孝** 芙蓉会病院　医師 **村　上　拓　也** ㈳地域医療振興協会 地域医療研修センター 副センター長 **八　森　　淳**			
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 5,000円	弘前大学・三沢市教育委員会	15名 修了者 14名

(2) 生涯学習講演会

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
弘前大学生涯学習講演会 5月13日（金） 手軽にできる運動で健康を保持しよう 9月9日（金） がん予防5つの目標 10月7日（金） 食べものの安全性は確保されているのだろうか 時　間 18：30～20：30	教育学部　教授 **本　間　正　行** 医学部　教授 **水　島　　豊** 農学生命科学部　教授 **戸　羽　隆　宏**	健康は生活を営む上で最も基本となるものです。中高年になってからの健康保持をめざすには，手軽なスポーツ・運動が何よりです。また、スポーツなどをとおして「仲間づきあい」を広めていくことも，健康的な生活を送る上で大切なのではないでしょうか。 がんは我が国の死亡原因のトップを占め、今後も増え続けると推測されています。肺がんや大腸がんなど、がんの一部は生活習慣病と考えられています。がんはなぜできるのか、どうすれば予防できるのかを一緒に考える。 食べものは健康を保持する上で最も大切なものの一つですが，果たして安全性は確保されているのか考える。		下北文化会館
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前大学農学生命科学部 むつ市教育委員会・県民カレッジまさかり学友会共催	延べ 99名

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
レクチャーコンサートシリーズ 2005 7月19日（火） クラリネットの魅力 10月18日（火） ガブリエーレ・プロイ サウンドスケープコンポジション 12月20日（火） ピアノの魅力 時　間 18：00～20：00	ルイヴィル大学　助教授 **ダラス・ティッドウェル** 声楽家 **エディス・デイヴィス・ティッドウェル** 教育学部　教授 **浅　野　　清** 欧州サウンドスケープ学会長 **ガブリエーレ・プロイ** 教育学部　助教授 **今　田　匡　彦** 教育学部　教授 **浅　野　　清**	クラリネット，ピアノ，声楽の種種の組み合わせによる作品を説明やトークを交えながら演奏し，クラリネットの魅力，二重奏の楽しみなどを伝える。 ニューールンベルク電気工学学校講師でもあるサウンド・アーチストによるレクチャー及びコンサート。通訳付き。 東西の作曲家によるピアノ作品を集め，ピアノ音楽のもつ魅力を語りながら演奏した。		弘前市立百石町展示館
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前市教育委員会・弘前大学生涯学習教育研究センター	延べ 274名
美術体験講座 **「美術になっちゃおう」** 8月27日（土） 時　間 10：00～12：00	教育学部　助教授 **芳　野　　明**	「図画工作」や「美術」というと，学校で勉強する何か立派なことのような気がしませんか。実は美術やそれに似たものは私たちの生活の中にあふれています。 街角の彫刻，カレンダーに印刷されている巨匠の絵画等々，私たちは実は美術にとりまかれています。この講座では，絵や彫刻の中の人間や動物たちがどんなことを感じ，考えているのかを，身体を思いっきり動かしながら探った。		弘前大学教育学部音楽ホール
		対象・参加費	主　催	受講者
		小学生 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター 弘前市教育委員会後援	7名
生涯学習連続講演会 **「鰺ヶ沢地域の課題と将来展望」** 10月6日（木） 鰺ヶ沢地域の振興課題と今後の可能性	農学生命科学部　教授 **神　田　健　策**	弘前大学では，平成16年度から鰺ヶ沢地域の総合的な調査研究活動を行っています。地域の自然・産業・経済・医療などの領域にまたがる，総合的調査です。調査は，行政・		鰺ヶ沢町中央公民館

10月13日（木） 地域活性化と情報・交通ネットワーク 10月20日（木） 地域の自然エネルギー開発を推進しよう 10月27日（木） 地域住民の参加・参画によるまちづくり 11月2日（水） 寿命を延ばすために 時　間 18：30～20：30	人文学部　教授 **香　取　　薫** 理工学部　教授 **稲　村　隆　夫** 教育学部　教授 **北　原　啓　司** 医学部　教授 **中　路　重　之**	企業・団体の多くの方々に協力していただいていますが，そのお礼の意味を含め，この調査で明らかになったことをふまえて開催した講演会。		
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター 鰺ヶ沢町共催	延べ 223名
生涯学習講演会 **「生活習慣病を考える」** 10月15日（土） 食と運動 10月22日（土） 肥満と疾病 時　間 13：00～15：00	医学部　講師 **梅　田　　孝** 医学部附属病院　講師 **小　川　吉　司**	生活習慣病の乱れが原因でおこる生活習慣病には，癌，糖尿病，脳卒中，心筋梗塞，肥満などがあり日本人の死因の6割以上を占めています。特に本県ではこれら疾病の罹患率も高く，健康指数を引き下げられています。食生活の面から健康を考え，また，身近で簡単にできる運動を，実技を交えながら一緒に学ぶ。		十和田市民文化センター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター	延べ 31名
あおもり県民カレッジ **大学公開講座まつり** 10月15日（土） 生きがいのある生活とは ～生涯発達の視点から～ 時　間 13：30～15：00	生涯学習教育研究センター　助教授 **藤　田　昇　治**	「生きがい」をもって，健康で文化的な生活をおくるためにはどんなことが必要とされているのか考える。		エルム文化センター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	あおもり県民カレッジ 弘前大学生涯学習教育研究センター共催	19名
生涯学習連続講演会 **「明日の教育を考える」** 10月25日（火） 自然の豊かさ・すばらしさに学ぶ ～十二湖の生態を中心に～	教育学部　教授 **大　高　明　史**	教育をめぐる問題は,「学力問題」や「いじめ」等のほか，青少年の中では「ＮＥＥＴ」の問題も重視されてきています。教師・保護者・地域住民が一緒になって，今日の教育問題を自然認識・職業・戦後教育改革など様々な角度から考える。		（弘前会場） 弘前大学医学部コミュニケーションセンター （八戸会場） 弘前大学八戸サテライト

11月1日（火） 現代の若者像 ～働くことをどのように考えているのだろうか～ 11月8日（火） 戦後教育改革の意義を再確認しよう 時　間 18：30～20：30	学生就職支援センター 助教授 **小　磯　重　隆** 21世紀教育センター ・高等教育研究開発室 教授 **土持・ゲーリー・法一**	弘前大学と弘前大学八戸サテライトをインターネットで結び，リアルタイム・双方向通信で行った。		（弘前会場） 弘前大学医学部コミュニケーションセンター （八戸会場） 弘前大学八戸サテライト
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 教育関係者 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター	弘前 延べ38名 八戸 延べ12名
懇談会「就職への道」 10月29日（土） 「就職と大学生活」 時　間 13：30～15：30	話題提供 ㈱日本マンパワー人材開発営業本部長 **二階堂　孝　志** 司会 生涯学習教育研究センター　助教授 **藤　田　昇　治**	総合文化祭の一環として，学生・高校生を主たる対象とした懇談会を開催し，就職するために大学でどのように学び自己の能力を開発するか，社会人としての人生設計をどのように考えるか，どのような規準で大学・学部を選択するか，といった内容で話し合いを行った。		総合教育棟 404講義室
		対象・参加費	主　催	受講者
		大学生 高校生 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター 青森県若年者就職支援センター（ジョブカフェあおもり）共催	9名
生涯学習セミナー **「医療と倫理」** 11月19日（土） 時　間 13：00～16：00	医学部　教授 **泉　井　　亮** 医学部　教授 **水　沼　英　樹** 八戸市立市民病院院長 **三　浦　一　章**	1. 記録映画「臨死」の上映 2. フリーディスカッション「医療のあり方を考える」 人間性豊かで，思いやりがあり，信頼できる医療は私達すべての願いです。記録映画「臨死」は病院で死に直面している患者さんとその家族，治療にあたる医療スタッフの対応を忠実に記録しています。この映画を観て，私達の望む医療の実現のために私達がなすべきこと，医療側が心がけるべきことについて考えた。		三八教育会館
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター	48名

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
生涯学習セミナー **「弘前の豊かな魅力を掘りおこす」** 12月1日（木） 古地図にみる弘前・弘前城 ～津軽藩の誕生と弘前城の謎を解く～ 12月2日（金） 弘前の懐 ～庶民の近・現代史～ 時　間 18：30～20：30	教育学部　教授 **齊　藤　利　男** ジャーナリスト **丸　谷　　馨**	弘前市民の「観光ホスピタリティ」の向上を図るため，弘前・津軽地域の歴史・文化について，理解を深める機会とし，私たちが住んでいる地域の「豊かな魅力」を再発見する。		弘前大学医学部コミュニケーションセンター
		対象・参加費	主　催	受講者
		商工関係者 一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター	延べ 90名
生涯学習特別セミナー **「野菜を科学する」** 12月14日（木） 青森の農産物から探るあなたの健康 皮膚の元気を野菜から考える 時　間 16：00～18：00	大学院地域社会研究科地域産業研究講座教授・地域共同研究センター長 **加　藤　陽　治** 農学生命科学部　教授 **片　方　陽太郎**	～野菜と健康～ 科学の眼を通して野菜をながめると，人の健康維持に役立つ機能が見えてきます。元気に生きるために先ず野菜を理解することから始めた。		朝日信用金庫船堀センター
		対象・参加費	主　催	受講者
		農業従事者 農業関係者 一般 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前大学地域共同研究センター・江戸川区農業経営者クラブ 江戸川区後援	50名
生涯学習講演会 2月22日（水） 樋口一葉『たけくらべ』を読む ～近代文学研究の立場から・国語教育の立場から～ 時　間 18：30～20：30	教育学部　助教授 **山　本　欣　司**	樋口一葉は近代初の女流文学者として注目されています。その作品「たけくらべ」について理解を深めるとともに，国語教育の教材として今後どのように深められるべきか，考えてみる。 弘前大学八戸サテライトと弘前大学をインターネットで結び，リアルタイム・双方向通信で行った。		（八戸会場） 弘前大学八戸サテライト （弘前会場） 弘前大学医学部コミュニケーションセンター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 教育関係者 無料	弘前大学生涯学習教育研究センター	八戸 12名 弘前 16名

(3) その他

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
観光ビジネススクール「はやて」 **～ホスピタリティ能力養成講座～**		新幹線が八戸まで開通したことによる経済効果は，観光をはじめ地域産業と様々に結びついています。今後の地域活性化，企業・個人としてのビジネスチャンス，行政としての課題なども視野に入れながら，ホスピタリティ能力の向上・キャリアアップを目指した。		総合教育棟人文学部多目的室ほか
6月23日（木） 青森県の観光について	人文学部　助教授 **森　　樹　男**			
	青森県観光推進課 総括主幹 **秋　田　佳　紀**			
6月30日（木） サービス接遇の基本	弘前観光コンベンション協会　専務理事 **飯　塚　和　剛**			
7月7日（木） ホスピタリティ産業における接客	ＪＡＬ客室乗務員 **柴　田　佳　枝**			
7月14日（木） 電話応対マナー	ＮＴＴ人材育成専属講師 **秋　元　宏　子**			
7月21日（木） 牛角躍進の裏側 ～マニュアル以上の接客術～	レインズインターナショナル 牛角研修担当 **松　井　基　展**			
7月28日（木） ワークショップ				
8月25日（木） 地域における観光開発 ～ウェスパ，つるつるワカメなど～	ふかうら開発 代表取締役専務 **石　澤　　優**			
9月1日（木） 消費者ニーズに対応した産地戦略	伊勢丹ＭＤ統括部 支店催事部物産展担当長 **髙　橋　貞　男**			
9月8日（木） 宿泊施設におけるホスピタリティ	アソベの森いわき荘 常務理事・総支配人 **齊　藤　　浩**			
9月15日（木） ふるさとの宝をみつけよう	東日本旅客鉄道株式会社秋田支社 営業部長 **石　塚　友　寛**	対象・参加費	主　催	受講者
9月22日（木） 【公開講演会】 飛騨高山の観光とまちづくり	観光カリスマ 飛騨高山観光協会会長 高山商工会議所会頭 **蓑　谷　　穆**	学生 5,000円 一般 10,000円 法人 15,000円	弘前大学生涯学習教育研究センター・青森県文化観光部 弘前市・弘前商工会議所・弘前観光コンベンション協会　後援	33名 公開講演会 75名
10月27日（木） 成果発表会 時　間 18：30～20：30				

<table>
<tr><th>名称・開催日</th><th>講　　師</th><th colspan="2">内　　容</th><th>会　場</th></tr>
<tr><td rowspan="3">平成17年度第1回公民館関係者合同研修会

7月20日（水）
大学開放の将来展望
－弘前大学はどう変わるのか－

時　間
13：30～15：00</td><td rowspan="3">生涯学習教育研究センター　助教授
藤　田　昇　治</td><td colspan="2">弘前市の公民館等職員及び関係者が一堂に会し，弘前市生涯学習を推進する上で，資質向上を図ることをねらいとした研修会。
弘前大学の実践と将来展望から今後の公民館との関わりについて学ぶ機会とした。</td><td>弘前市総合学習センター</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>弘前市立公民館・生涯学習課・学習情報館職員

無料</td><td>弘前市学習情報館

弘前大学生涯学習教育研究センター共催</td><td>47名</td></tr>
<tr><td rowspan="3">弘前大学生涯学習シンポジウム
生涯学習の未来像
－ EU と日本の比較から－

3月1日（水）
ドイツとスイスにおける生涯学習の現状と課題

日本における生涯学習と大学の役割

時　間
18：30～20：30</td><td rowspan="3">チューリッヒ大学教授
フィリップ・ゴノン

生涯学習教育研究センター　助教授
藤　田　昇　治</td><td colspan="2">ＥＵ統合後新たな展開を示しているドイツとスイスの生涯学習，そして「構造改革」が推進される中で岐路に立つ日本の生涯学習。国際比較を通して，これからの生涯学習を展望。</td><td>弘前大学医学部コミュニケーションセンター</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>生涯学習・社会教育関係者及び一般

無料</td><td>弘前大学生涯学習教育研究センター

弘前市教育委員会共催</td><td>18名</td></tr>
</table>

(4) ホームページ　On-Line 公開講座

本センターの役割の一つである、弘前大学をより広く市民に知ってもらうことを目的として、ホームページの充実を図り、これまでのページに以下の項目を追加した。

○シリーズ１「弘前大学における教育」－最近のトピックス－

第８回　　教育におけるインターネット資料の利用
　　－インターネット資料の利用法と注意点－
（人文学部　教授　齊　藤　義　彦）

第９回　　日本技術者教育（JABEE）認定取得による学部教育の改革
（農学生命科学部　教授　万　木　正　弘）

第10回　医学部保健学科による「ＦＤフォーラム」について
（医学部保健学科　教授　對　馬　　均）
第11回　弘前大学ＳＤ章　　－医師になる決意と責任を自覚させる－
（医学部医学科　教授　泉　井　　亮）
第12回　弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞
－先輩と後輩が互いに見つめ合い高め合う新しい弘前大方式－
（医学部医学科　教授　加　藤　博　之）
第13回　弘前大学医学部医学科ＳＤ（Student　Development）シンポジウム
－患者と医師の関係，研修のあり方を討論を通して学ぶ－
（医学部医学科　教授　福　田　幾　夫）
第14回　衛星画像処理のためのソフトウェアの開発
－対話型の開発環境の利用－
（理工学部　教授　飯　倉　善　和）
第15回　社会性を養うための学内横断的連携による学生教育の試み
－いま，日本の大学で何が求められているか－
（医学部医学科　教授　中　路　重　之）
第16回　授業改善への取り組み
－いま，日本の大学で何が求められているか－
（21世紀教育センター　教授　土持ゲーリー法一）
第17回　ＡＨＡ心肺蘇生法の教育
－普及と教育法としてのシュミレーションの利用－
（医学部医学科　講師　花　田　裕　行）
第18回　教育実習の充実・体系化
－弘前より，教員養成の新たな挑戦が始まった－
（教育学部　助教授　福　島　裕　敏）
第19回　知能機械工学創造実習
－ものづくりを体験し，自らのアイデアを実現する－
（理工学部　助教授　佐　川　貢　一）
第20回　大学教育と大学図書館
－大学改革は図書館から－
（21世紀教育センター　教授　土持ゲーリー法一）

○シリーズ２「市民のための身体症候学」－こんな症状でお悩みの方へ－
第６回　頭痛　（脳神経外科学講座　教授　大　熊　洋　揮）
第７回　排尿障害　（泌尿器科学講座　教授　大　山　　力）
第８回　腰痛　（青森労災病院整形外科部長　教授　岡　田　晶　博）
第９回　腹痛　（内科学第一講座　助教授　福　田　眞　作）
第10回　血便　（内科学第一講座　助教授　福　田　眞　作）
第11回　動悸・息切れ　（内科学第二講座　教授　奥　村　　謙）

第12回　胸痛　（内科学第二講座　教授　奥　村　　謙）
第13回　めまい　（耳鼻咽喉科学講座　助手　石　井　賢　治）
第14回　やせ（体重減少）　（内科学第三講座　教授　須　田　俊　宏）
第15回　肥満　（内科学第三講座　教授　須　田　俊　宏）

○健康コラム「生き生き人生」－健康一口メモ－

執筆者　医学部医学科　教授　水　島　　豊

第15回　睡眠時無呼吸症候群と事故
第16回　痛風発作
第17回　がん予防５つの目標
第18回　「平均寿命」から「健康寿命」，更に「健康幸福寿命」へ
第19回　老いては子に頼らない
第20回　脳作業の勧め
第21回　野菜のちから
第22回　土用丑の日に鰻
第23回　90の手習い
第24回　完全な健康はない
第25回　健康入浴法
第26回　肺結核
第27回　生き方上手
第28回　随喜功徳
第29回　たばこと健康
第30回　高血圧はなぜ体に悪いか
第31回　低血圧への対処
第32回　酒と健康－二日酔い－
第33回　抗加齢医学を知る
第34回　糖尿病に克つ
第35回　転倒・骨折の予防
第36回　腰痛

2. 学部の主催事業など

(1) 人文学部

名称・開催日	講　師	内　容		会　場
環日本海学会 **第11回学術研究学会** 10月1日（土） シンポジウム 「越境広域経営と地域主義」 10月2日（日） 分科会（個別報告） 時　間 13：00～18：00 9：00～16：00	『NorVision』策定ワーキンググループ委員長，デンマーク環境省（現EU EPSONコーディネーターとしてEU在駐） **フレミング・ソーナス** 総合研究開発機構（NIRA）理事 **澤　井　安　勇**	・環日本海学会年次学術研究大会 大会テーマ「越境広域のグランドデザイン構築：環日本海（東海）地域の平和と相互交流促進の展望」 ・シンポジウムテーマ「越境広域経営と地域主義」 北東アジアの地域協力グランドデザインの日本での初めての画期的な比較シンポジウム		（シンポジウム） 弘前大学創立50周年記念会館 （分科会） 弘前大学総合教育棟
		対象・参加費	主　催	受講者
		環日本海学会会員 一般 無料	環日本海学会	250名
人文学部文化財論講座 **レクチャーシリーズ「おさけ」** 10月29日（土） 時　間 13：00～15：00	人文学部　助教授 **関　根　達　人** 人文学部　助教授 **足　達　　薫** 人文学部文化財論講座教員全員	レクチャーとフリートーク		弘前大学 人文学部
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学人文学部文化財論講座	60名
亀ケ岡文化の世界 11月2日（土） 時　間 14：00～17：00	弘前大学名誉教授 **村　越　　潔**	人文学部附属亀ケ岡文化研究センター開設記念ミニ特別展「亀ケ岡文化の世界」（10月29日～11月23日）にあわせ、本学名誉教授で縄文文化研究に造詣の深い村越潔先生に、亀ケ岡文化の特徴やそれに関する研究史をお話しいただいた。		弘前大学文京町キャンパス人文棟305講義室
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	人文学部附属亀ケ岡文化研究センター	一　般　63名 学　生　8名 教職員　1名

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
フォーラム **青森県の労働市場の現状を考える** ９月２日（金） 時　間 18：30～20：30	青森銀行総合企画部副部長 **高　山　　貢** 青森県商工労働部労政・能力開発課長 **黒　澤　　朗** パネリスト 人文学部助教授 **李　　永　俊** 大学院地域社会研究科　教授 **佐々木　純一郎** 人文学部助教授 **紺　屋　博　昭**	県内における雇用問題の実態を把握することで現在の厳しい雇用情勢からの打開策を提案し、地域社会の発展に貢献することを目的として2005年８月１日に発足した弘前大学人文学部雇用政策研究センターの第１回「雇用政策研究センターフォーラム」が９月２日、青森市の男女共同参画プラザで開かれた。		青森市男女共同参画プラザカダール アウガ5階AV多機能ホール
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学人文学部附属雇用政策研究センター	150名
第１回ビジネス講座 **「八戸地域の雇用状況を考える」** 10月８日（土） 時　間 15：00～17：00	八戸信用金庫はちしん地域経済研究所所長 **髙　橋　俊　行**	諸分野の専門家などを招き、ヒアリングを通して地域雇用の実情を把握するために、2005年10月８日、第１回雇用政策研究センター・ビジネス講座をJR八戸駅前、ユートリーで開催した。 ビジネス講座の講師は八戸信用金庫理事はちしん地域経済研究所所長、髙橋俊行氏で、八戸市の雇用状況について講演が行われた。		弘前大学八戸サテライト
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学人文学部附属雇用政策研究センター	20名

(2) 教育学部

名称・開催日	講　　師	内　　容	会　場
「自分づくり」のための道標 ８月27日（土） ９月３日（土）	教育学部　助教授 **今　田　匡　彦** 教育学部　助教授 **小　岩　直　人** 教育学部　教授 **本　間　正　行** 教育学部　教授 **伊　藤　成　治**	「自分づくり」は人生のゴールインするまで、生涯の課題でもあります。その「自分づくり」にわれわれ教育学部のスタッフが少しでもお手伝いできればということで、それぞれ専門とする立場から「自分づくり」のための道標を立てて行きます。講座内容は、人文科学、自然科学、健康科学、芸術等の視点から生活の	鶴田町公民館

時　間 13：00～16：30		知恵や教養を深める糸口をごく身近な題材からわかりやすく展開します。		
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 3,500円	弘前大学教育学部・鶴田町教育委員会共催	41名 修了者 41名
「自分づくり」のための道標 10月8日（土） 10月15日（土） 10月22日（土） 10月29日（土） 時　間 13：00～16：30	教育学部　助教授 **戸　塚　　学** 教育学部　教授 **岩　井　康　頼** 教育学部　教授 **山　口　爲　廣** 教育学部　教授 **鎌　田　耕太郎** 教育学部　助教授 **高　橋　俊　哉** 教育学部　教授 **猪　瀬　武　則** 教育学部　教授 **北　原　啓　司** 教育学部　助教授 **杉　原　かおり**	「自分づくり」は人生のゴールインするまで、生涯の課題でもあります。その「自分づくり」にわれわれ教育学部のスタッフが少しでもお手伝いできればということで、それぞれ専門とする立場から「自分づくり」のための道標を立てて行きます。講座内容は、人文科学、自然科学、健康科学、芸術等の視点から生活の知恵や教養を深める糸口をごく身近な題材からわかりやすく展開します。		つがる市生涯学習交流センター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 7,000円	弘前大学教育学部・つがる市教育委員会共催	16名 修了者 16名
自然の事象に立脚した観察実験－知的好奇心を刺激し，探求心を深め，理科好きを持続させるための工夫－ 7月30日（土） 身の回りの道具 －てこ・天秤など誤解を生みやすい実験－ 身の回りの“もの”を科学する －自然が創る“もの”についての観察実験－ 7月31日（日） 身の回りの放射線 身の回りの環境 時　間 9：30～16：30	教育学部　教授 **東　　徹** 教育学部　教授 **堀　内　弘　之** 教育学部　助教授 **山　本　逸　郎** 教育学部　助教授 **長　南　幸　安**	自然と密着した身の回りの事象を分かりやすくとらえ，興味関心を深める講座です。 ※この講座は文部科学省SPP事業の「教員研修」として開講され，青森県教育委員会との連携講座として実施		弘前大学教育学部・物理学実験室，他
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料	青森県教育委員会・弘前大学教育学研究科連携	22名

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
ハワイ島の歩き方 ８月１日（月） 時　間 10：00～12：00 13：30～15：30	教育学部　教授 **鎌　田　耕太郎**	ハワイ諸島の景観をつくるのは玄武岩の活動と貿易風のもたらす雨，そして時に南極から到達する大波です。講座ではハワイ島でみられる活発な火山活動の諸現象（カルデラや楯状火山，溶岩流のタイプ，溶岩噴泉など）を紹介し，火山島の形成と植物に見られる環境回復などについて学びます。またハワイ島の観光資源を利用した，小・中・高・大学，生涯教育それぞれの過程に対応可能な教材資料の収集に便利な旅のコツを紹介します。		弘前大学八戸サテライト
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料	弘前大学大学院教育学研究科	５名
小学校英語教育基礎： **Stories（物語）in English** ８月１日（月） ８月２日（火） 時　間 9：30～12：00 13：00～15：30	教育学部　外国人教師 **ラウシュ・アンソニー**	小学校での英語活動における英語の物語の利用をテーマとするものです。以下の３つの物語の利用方法を紹介します。⑴カリキュラム全体を物語で構成する方法；⑵物語を基本にした個別のアクティビティの活用；⑶英語のインプットを増やすための物語の利用。物語の利用は英語に自信のない方が英語活動を始めるための一つの方法である。各受講者の担当学年にふさわしい物語(講師準備)の朗読練習をすることが求められます。		（１日） 弘前大学 教育学部 107 教室 （２日） 弘前大学青森サテライト教室
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料	弘前大学大学院教育学研究科	（１日）８名 （２日）１名
ワークショップ **「実践をつうじて学ぶ特別支援教育」** ８月２日（火） ８月３日（水） ８月４日（木） ８月５日（金）	教育学部　教授 **松　本　敏　治** 教育学部　教授 **安　藤　房　治** **ほか**	LD・ADHD・高機能自閉症等の特別支援教育対象児童・生徒の理解と対応を，1）講義，2）実際の指導を通じて学ぶ。１日目：軽度発達障害の心理・指導方法，特別支援教育の制度等についての講義。2～4日目：午前，軽度発達障害児への指導。午後カンファレンス。		弘前大学教育学部附属養護学校

時間 9：00～12：00 13：00～17：00		今年度は広汎性発達障害の児童生徒を対象とした指導を予定している。		
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料 但し，教材費3,000円程度	弘前大学大学院教育学研究科	11名
教師のための地域環境史入門 8月3日（水） 時　間 10：00～12：00 13：30～15：30	教育学部　教授 **鎌　田　耕太郎**	生活の土台である大地は，地球誕生以来の環境変遷や生物進化の様子が記録された「古文書」です。環境保全や限りある資源の有効活用，頻発する局地的自然災害などの課題に対して地球環境史から学ぶことはたくさんあります。講座では青森平野や夏泊半島，十和田湖・八甲田火山等を題材に，地球固有の地球史を記録した「古文書」解読の方法を学習し，地域教材のまとめかたや活用の方法について助言します。		弘前大学青森サテライト教室
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料	弘前大学大学院教育学研究科	2名
教師のための環境リテラシー 8月8日（月） 時　間 10：00～12：00 13：00～17：00	教育学部　助教授 **長　南　幸　安**	総合的な学習の時間などで環境問題を子ども達に教える機会が増えました。しかしそれを指導する教師のほとんどは新聞やテレビ等からのみの情報であり，それが真実であると信じていますが，それは本当に正しいことなのでしょうか。当講座では，ダイオキシン・環境ホルモン・地球温暖化問題などについて，現在の環境を正確に理解し，児童・生徒に環境問題というものを正しく伝えられる能力を身に付けた教師の育成を目指します。		弘前大学青森サテライト教室
		対象・参加費	主　催	受講者
		現職教員及び教育関係者 無料	弘前大学大学院教育学研究科	2名

<table>
<tr><th>名称・開催日</th><th>講　　師</th><th colspan="2">内　　容</th><th>会　場</th></tr>
<tr><td rowspan="3">美術の見方・考え方

８月８日（月）

時　間
13：00～17：00

８月９日（火）

時　間
9：00～12：00</td><td rowspan="3">教育学部　助教授
芳　野　　明</td><td colspan="2">美術科授業での鑑賞の重要性が増しました。この講座ではまず最初に「美術」とは何かを考えます。そこから「美術の鑑賞」を定義していき，最終的に数点の美術作品を取り上げて，単なる印象批評にとどまらない，システマティックな方法を用いた具体的な鑑賞の事例を提示します。対象は主として中学校教員となりますが，興味のある方の受講は歓迎いたします。</td><td>弘前大学八戸サテライト</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>現職教員及び教育関係者

無料</td><td>弘前大学大学院教育学研究科</td><td>７名</td></tr>
<tr><td rowspan="3">ピタゴラスの定理とその発展

９月11日（日）

時　間
10：00～12：00
13：30～16：30</td><td rowspan="3">教育学部　教授
太　田　伸　也</td><td colspan="2">ピタゴラスの定理のいろいろな証明とその発展を考えます。実際に紙を切って敷き詰めてきたり，作図しながら図形を考察したりしようと思います。この教材は中学校の三平方の定理，高等学校の余弦定理などに直接的に関係しますが，小学校の「敷き詰め」の教材を見直すきっかけになることも期待します。コンパス，定規，ハサミ，セロハンテープをご用意ください。</td><td>弘前大学八戸サテライト</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>現職教員及び教育関係者

無料</td><td>弘前大学大学院教育学研究科</td><td>２名</td></tr>
</table>

(3) 医学部

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
施設における寝たきりをなくす **―廃用症候群を防ぐための理論と実践―** 9月16日（金） ・廃用症候群の予防に必要な基礎知識（講義） ・廃用症候群における骨関節病変（講義） ・廃用症候群を防ぐための機器と住環境（講義） ・廃用症候群予防の実際（講義） ・廃用症候群予防の実践対策（実習） 時　間 9：00～15：10	保健学科 理学療法学専攻 **岩田　学** **秋元博之** **金沢善智** **若山佐一** **石川　玲** **尾田　敦** **吉田英樹**	今回保健学科理学療法学専攻では，老人医療・介護の現場において，古くて新しい問題である廃用症候群をテーマに，予防の観点から講義と実習を企画してみました。		弘前大学医学部保健学科
		対象・参加費	主　催	受講者
		老人施設職員及び保健師等老人福祉に携わる方 2,500円	弘前大学医学部保健学科理学療法学専攻	37名
アレルギー 8月26日（金） アレルギー性鼻炎・花粉症 アレルギー性皮膚炎 9月2日（金） 食物アレルギー アレルギー発現作用機序 9月9日（金） 小児喘息 アレルギー性結膜炎 9月16日（金） 喘息 薬疹（くすりまけ） 時　間 18：30～20：30	医学科 耳鼻咽喉科学講座 **松原　篤** 皮膚科学講座 **武田仁志** 内科学第一講座 **坂本十一** 細菌学講座 **中根明夫** 小児科学講座 **田中　完** 眼科学講座 **水谷英之** 内科学第二講座 **高梨信吾** 皮膚科学講座 **松﨑康司**	現在国民の3割が何らかのアレルギー性疾患を有していると言われています。そこで今回医学科では，下記のアレルギー性疾患につき，それぞれの専門の先生方から最新の情報をお話しいただきます。		弘前大学医学部コミュニケーションセンター
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 無料	弘前大学医学部医学科広報委員会	延べ 241名

<table>
<tr><th>名称・開催日</th><th>講　　師</th><th colspan="2">内　　容</th><th>会　場</th></tr>
<tr><td rowspan="3">弘前大学医学部医学科
「健康・医療講演会」

12月10日（土）
食物アレルギー

ウィルス性肝炎の最近の話題
～肝癌にならないために～

時　間
14：00～16：00</td><td>医学科
内科学第一講座
坂　本　十　一

黒石病院内科部長
三　上　貴　史</td><td colspan="2">医学部医学科では、「地域に貢献する医学部」を目指し、毎年、青森県内自治体病院のご協力の元に、広く青森県在住の一般市民を対象とし、「健康・医療講演会」を開催しております。</td><td>黒石スポカルイン大会議室</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>一般

無料</td><td>弘前大学医学部医学科広報委員会
共催／
黒石市国民健康保険黒石病院・㈳青森医学振興会</td><td>37名</td></tr>
<tr><td rowspan="3">弘前大学医学部医学科
「健康・医療講演会」

2月4日（土）
沈黙の殺人者
～高血圧の予防と治療～

ストレス社会と心の病気
～うつ病を中心に～

時　間
14：00～16：00</td><td>医学科
内科学第二講座
長　内　智　宏

むつ総合病院
精神神経科部長
庭　山　英　俊</td><td colspan="2">医学部医学科では、「地域に貢献する医学部」を目指し、毎年、青森県内自治体病院のご協力の元に、広く青森県在住の一般市民を対象とし、「健康・医療講演会」を開催しております。</td><td>むつグリーンホテル大ホール</td></tr>
<tr><td>対象・参加費</td><td>主　催</td><td>受講者</td></tr>
<tr><td>一般

無料</td><td>弘前大学医学部医学科広報委員会
共催／
むつ総合病院・㈳青森医学振興会</td><td>144名</td></tr>
</table>

(4) 理工学部

名称・開催日	講　師	内　容		会　場
夏休みの数学 2005 8月3日（水）～8月5日（金） 時　間 10：00～16：00	理工学部　教授 **本　瀬　香** 理工学部　教授 **中　里　博** 理工学部　教授 **榊　真**	数学の啓蒙を目的として，数学のおもしろさと多様性を理解してもらう講座です。		弘前大学理工学部
		対象・参加費	主　催	受講者
		中・高校教員 高校生 一般 無料	弘前大学理工学部	35名
夢・化学－21「化学への招待」弘前大学一日体験化学教室 8月4日（木） 時　間 10：00～16：30	理工学部，教育学部の化学系教員	講演と化学実験を通じて「化学」のおもしろさを身近に感じながら21世紀の「夢」を語り合う講座です。 午前：講演 午後：6～8名程度にグループ分けして，専門的実験を体験		弘前大学理工学部，教育学部
		対象・参加費	主　催	受講者
		中学生 高校生 一般 無料	日本化学会東北支部・化学工学会（夢・化学21委員会）	81名
楽しい科学 総合文化祭開催期間中 時　間 10：00～16：00	理工学部教員	大学の教育機能や施設を広く一般に開放，インターネットや簡単な化学実験を体験してもらいます。		弘前大学理工学部
		対象・参加費	主　催	受講者
		小学生，中学生とその父母 無料	弘前大学理工学部	延べ 158名 ※楽しい科学とサイエンスへの招待との合算
サイエンスへの招待 総合文化祭開催期間中 時　間 10：00～16：00	理工学部教員	大学の研究室や各種実験装置を公開し，教員や大学院生らが日頃の研究成果や最新の科学技術を公開実験を中心に紹介･解説することにより「見える科学・技術」を紹介・解説するものです。		弘前大学理工学部
		対象・参加費	主　催	受講者
		小学生，中学生，高校生，一般 無料	弘前大学理工学部	延べ 158名 ※楽しい科学とサイエンスへの招待との合算

(5) 農学生命科学部

名称・開催日	講　　師	内　　容		会　場
八戸市民大学講座 9月7日（水） 日本の「食」は大丈夫か？ 時　間 18：30～20：00	農学生命科学部　助教授 **澁　谷　長　生**	・「食」は今どうなっているのか ・「食」の安全性 ・食料生産現場の変化 ・外食のシフトを簡便化 ・農産物直売所の隆盛		八戸市公会堂文化ホール
		対象・参加費	主　催	受講者
		八戸市民大学講座受講者 無料	弘前大学農学生命科学部・八戸市教育委員会共催	350名
農学生命科学・公開講座 10月29日（土） 農業未利用資源活用をもちいた地域づくりの方法と課題 未利用資源活用の魔法の技術～高温高圧処理による機能性活用～ 時　間 13：30～15：30	農学生命科学部　助教授 **泉　谷　眞　実** 農学生命科学部　教授 **宮　入　一　夫**	農業未利用資源の有効活用について －青森県のバイオマス－		弘前大学農学生命科学部203講義室
		対象・参加費	主　催	受講者
		中学生以上一般市民 無料	弘前大学農学生命科学部	延べ40名
白神山地観察会 5月14日（土） 10：00～16：00 7月23日（土） 9：00～15：00 10月22日（土） 10：00～15：00 3月11日（土） 9：00～15：00	2～3名	年度内4回，四季折々の白神山地の自然を歴史的観点をも交えて観察する。		白神山地
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 テキスト代・傷害保険代金として500円程度	弘前大学農学生命科学部附属生物共生センター・白神研究会	延べ44名
親子体験学習 **－触れあい合おう，人と自然と農業に－** 5月28日（土） 6月18日（土）	**村　山　成　治** **長谷川　良　孝** **工　藤　啓　一** **舩　澤　陸　郎** **小　熊　美穂子** **佐々木　長　市** **佐　原　雄　二** **東　　信　行**	小学生親子に農業体験と自然学習をさせ，人間と地球環境のあり方を考える契機を与えることを目的として行う。		弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場

8月6日（土）～8月7日（日） 9月24日（土） 10月22日（土） 時　間 9：30～16：00	**小熊美穂子** **殿内暁夫** **伊藤大雄** **安藤喜一** **舩澤陸郎** **村山成治** **工藤啓一** **和島耕造** **長瀬公英** **小田桐正英** **村山成治**			
		対象・参加費	主　催	受講者
		小学生親子 親3,500円 子3,000円 （教材・宿泊料含む）	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場	21組47名 修了者 16組36名
リンゴを科学する 12月3日（土） 9：30～16：10 12月4日（日） 10：00～16：10 12月5日（月） 10：00～16：30	**伊藤大雄** **佐野輝男** **原田竹雄** **宇野忠義** **宮入一夫** **浅田武典** **張　樹槐** **長田恭一** **塩崎雄之輔**	リンゴの栽培方式，樹・果実の生理，病害虫防除，土壌肥料，品種，流通，海外事情その他，リンゴ農家に直接あるいは間接に役立つ話をする。1日3講座ずつ3日間で9講座を開く。		板柳町多目的ホールあぷる1階ホール
		対象・参加費	主　催	受講者
		リンゴ農家及び関係者 無料 ただし，テキスト代1,000円	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター・板柳町共催	99名
リンゴ剪定技術交流会 2月2日（木） 時　間 13：30～16：00	不明（藤崎町役場からの推薦）	整枝剪定の技術及び理論を学ぶ。		弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場
		対象・参加費	主　催	受講者
		リンゴ農家 無料	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター・藤崎町共催	100名

(6) 遺伝子実験施設

名称・開催日	講　師	内　容		会　場
遺伝子実験施設セミナー 10月27日（木） あるブリーダーの一年×12 10：00～11：30 11月24日（木） リンゴDNAマーカーの開発と染色体連鎖地図の作成 リンゴ交雑育種におけるDNAマーカーとゲノム情報の利用 15：30～17：30 12月27日（火） 花粉管誘導とフィリフォーム器官形成に必要な遺伝子，MYB98 11：00～12：00	**新　倉　　聡** **五十嵐　　恵** **赤　田　朝　子** **笹　原　竜四郎**	全国から来校した研究者や県内各地の研究者の研究成果に基づいた講演を行い，研究交流を行う。		弘前大学遺伝子実験施設
		対象・参加費	主　催	受講者
		一般 大学教職員 学生 無料	弘前大学遺伝子実験施設	各回50名

III. センター関連規則等

1. センター関連規則

(1) 弘前大学生涯学習教育研究センター規程

（平成16年4月1日制定
規　則　第　144　号）

（趣旨）

第1条　この規程は，国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号。以下「管理運営規則」という。）第6条第2項の規定に基づき，弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し，必要な事項を定める。

（目的）

第2条　センターは，学内共同教育研究施設として，生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い，弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

（業務）

第3条　センターは，次の各号に掲げる業務を行う。

(1) 生涯学習に関する教育内容・方法の研究
(2) 社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
(3) 生涯学習指導者の養成
(4) 生涯学習に関する情報の収集及び提供
(5) 生涯学習に関する相談事業
(6) 生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
(7) メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
(8) その他生涯学習に関すること。

（職員）

第4条　センターに，次の各号に掲げる職員を置く。

(1) センター長
(2) 専任教員
(3) その他必要な職員

（センター長の選考等）

第5条　センター長は，本学の教授をもって充てる。

2　センター長の選考は，管理運営規則第52条に定める教育研究評議会の推薦に基づき，学長が行う。

3　センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。

4　センター長は，センターの業務を掌理する。

（専任教員の選考）

第6条　センターの専任教員の選考は，教育研究評議会の議に基づき，学長が行う。

（センター協力教員）

第7条　センターに，センターが行う事業を円滑に実施するため，センター協力教員を置くことができる。

2　センター協力教員の任期は，担当する業務が終了するまでの期間とする。

3　センター協力教員は，学長が任命する。

（運営委員会）

第８条　センターの管理運営に関する事項を審議するため，弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2　運営委員会の組織及び運営については，別に定める。

（事務）

第９条　センターの事務は，学術情報部社会連携課において処理する。

（その他）

第10条　この規程に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，センター長が別に定める。

附　則

この規程は，平成16年4月1日から施行する。

附　則

この規程は，平成16年10月1日から施行する。

(2) 弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

（平成16年4月1日制定）

（趣旨）

第1条　この内規は，国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第8条の規定に基づき，弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第2条　運営委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) センター長

(2) センターの専任教員

(3) 各学部から推薦された教員各1名。ただし医学部にあっては，医学科1名，保健学科1名とする。

(4) 学長が指名する教員以外の職員1名

(5) その他委員長が必要と認めた職員

2　前項第3号の委員は，学長が任命する。

（委員の任期）

第3条　前条第3号の委員の任期は，2年とし，再任を妨げない。

2　前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第4条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

2　委員長は，会議を招集し，その議長となる。

3　運営委員会に副委員長を置き，委員長が指名する委員をもって充てる。

4　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代理する。

（会議）

第5条　運営委員会は，委員の過半数の出席をもって成立する。

2　運営委員会の議事は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（委員の代理出席）

第6条　委員に事故があるときは，当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

（委員以外の出席）

第7条　運営委員会が必要と認めたときは，委員以外の者を会議に出席させ，意見を聴くことができる。

（専門委員会）

第8条　運営委員会に専門的事項を調査し，又は企画，立案若しくは実施をするため，専門委員会を置くことができる。

2　専門委員会の名称，組織及び運営については，運営委員会が別に定める。

（庶務）

第９条　運営委員会の庶務は，学術情報部社会連携課において処理する。

（その他）

第10条　この内規に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，運営委員会が別に定める。

附　則

この内規は，平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

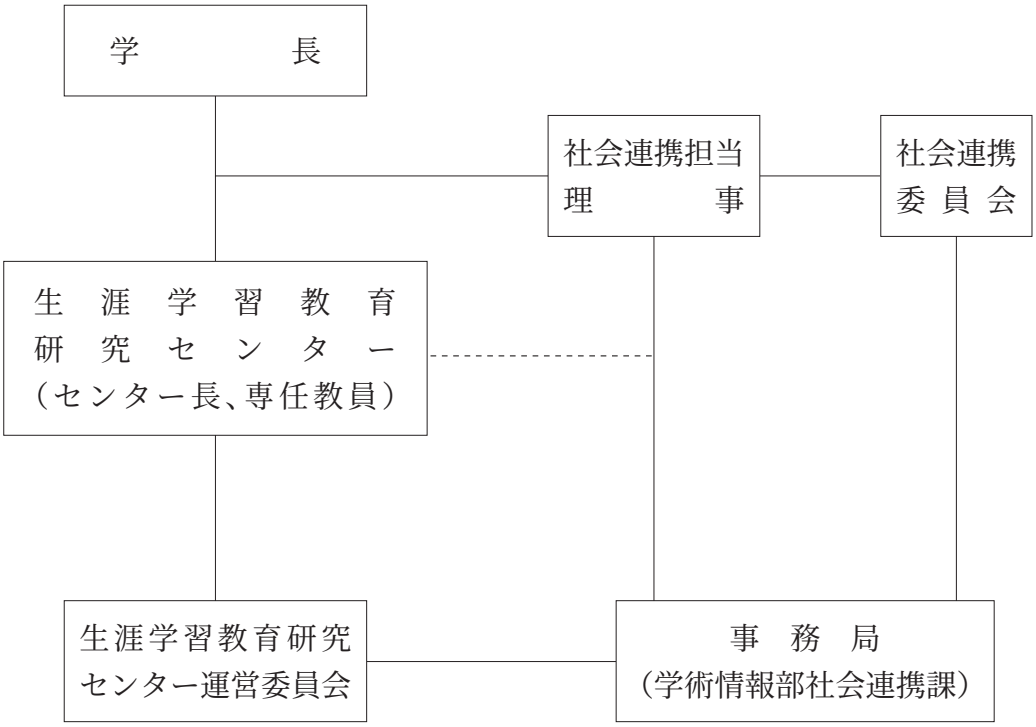
この内規は，平成 16 年 10 月 1 日から施行する。

附　則

この内規は，平成 17 年 10 月 28 日から施行し，平成 17 年 4 月 1 日から適用する。

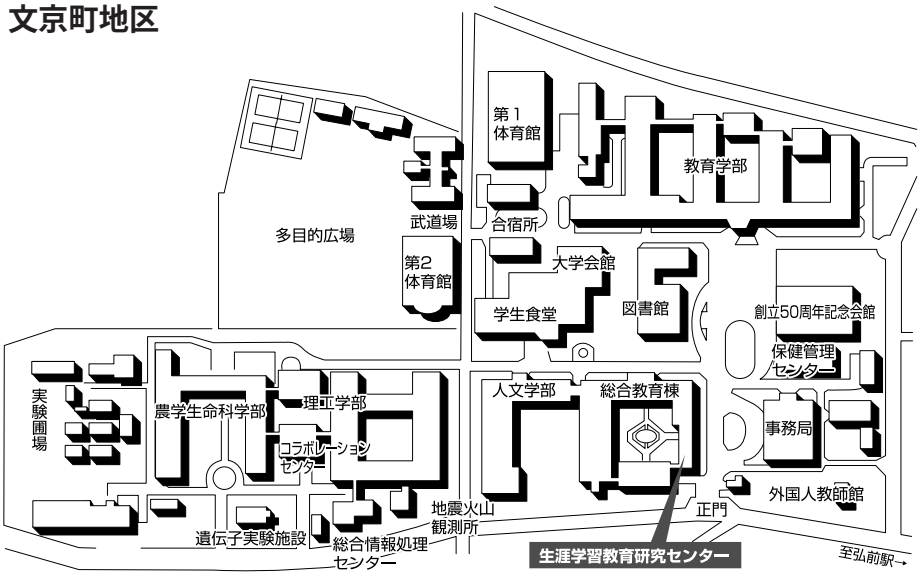
2. 機構・組織図

センターの運営は，各学部から推薦された委員（ただし医学部にあっては，医学科１名，保健学科１名），学長が指名する教員以外の職員１名，センター長並びに専任教員が構成員となった「弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会」で，全学的な視点から検討されることになっています。



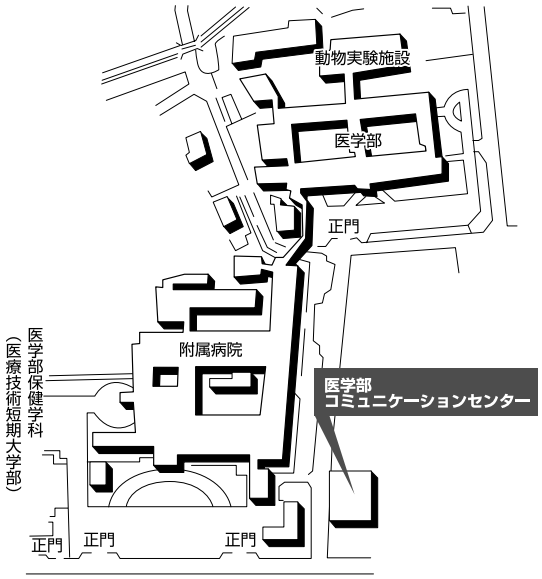
3．地図・連絡先

文京町地区



弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8560　弘前市文京町１番地
ＴＥＬ（0172）39－3148〈直通〉
ＦＡＸ（0172）39－3148

本町地区



分室（医学部コミュニケーションセンター）
〒036-8203　弘前市本町40－1
ＴＥＬ（0172）39－5240〈直通〉
ＦＡＸ（0172）33－4056

事務局　学術情報部社会連携課社会連携グループ
〒036-8560　弘前市文京町１番地
ＴＥＬ（0172）39－3904，3910
ＦＡＸ（0172）39－3919

編　集　後　記

弘前大学に生涯学習教育研究センターが設立されたのが平成８年５月である。10年近く活動を行ってきた中で、確実に地域生涯学習の推進に貢献してきたという「自負」をもっているのではあるが、独立行政法人化以降、また「小さな政府」をめざす「改革」が推進される中で、予算などの面では次第に制約が大きくなってきている。

また、全国的な動向としては、国立大学の生涯学習教育研究センターが組織として改組され、実質的に「解体・縮小」されている場合もある。

しかし、生涯学習は「人づくり」の基軸をなすものであり、地域生涯学習を推進する上で大学に対する期待は一段と大きなものになる、と考える。社会の動き、さらにその先を見据えた取り組みが求められている、と強く感じる今日この頃である。その意味で、今回の『年報』でキャリアアップ教育等について取り上げたことの意義は大きい、と考える。

発行　平成18年3月30日

弘前大学生涯学習教育研究センター
年報　第９号

発行　弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8560　弘前市文京町１番地
☎（0172）39－3148
印刷　やまと印刷株式会社
〒036-8061　弘前市神田４丁目４－５
☎（0172）34－4111

ANNUAL REPORT

CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING

HIROSAKI UNIVERSITY

NO.9, 2006

CONTENTS

Articles

On the Open University Concerned with Carrier Education

FUJITA Shoji ····· 1

An assignment for efforts to life-long learning:
a proposal based on the opening of extensive lectures on “the health”.

SUGA Sechiko ·····11

Report of Business School for Sightseeing Named Hayate ·····21

Activities of the Center for Research and Education of Lifelong Learning ·····63

Rules and Organization ·····85